

もし、一目前に戻れたら…

私たち(被災者)からみなさんに伝えたいこと

いちにちまえ
—『一日前プロジェクト』報告書—

平成23年3月

内閣府

はじめに

『一日前プロジェクト』は、多くの方々の協力を得て、開始から5年目を迎えました。自然災害の恐ろしさや災害に備えることの大切さに気づいてもらうことを目的に生み出された物語は、今年度新たに誕生した97編を加えると約550編という大部となります。

近年、気象の極端化を裏付けるように、各地で集中豪雨が発生し大きな被害をもたらしていることから、今年度は水害で被災された方々のヒアリングを重点的に実施しました。

「自分だけは大丈夫」と漠然と思っていた日常から、突如として水害の被災者の立場に追いやられた時の戸惑いや恐怖を、皆さん自身のことばで話してくださいました。

また、発生から10年の節目を迎えた鳥取県西部地震の被災者や災害対応に当たられた皆さんからも体験談を聞かせてもらいました。

これらの貴重なお話しをたくさんのお小さな物語に代えました。物語を我が身に置きかえて読み進めば、いつどこで起こるとも限らない自然災害にどう備えておけばよいかのヒントを見つけることができるでしょう。

これまでに作成された物語は全て、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」に掲載しています。物語やイラストは、非営利の目的であれば自由に使うことができますので、地域や職場、学校等で防災について考える際の教材として、また、広報誌やパンフレットの素材として広くご活用ください。

内閣府（防災担当）

災害被害を軽減する国民運動のホームページ：<http://www.bousai.go.jp/km/>

目 次

I . 一日前プロジェクトの概要	P1
II . 平成 22 年度実施要領	P2
III . 一日前プロジェクトのエピソードについて	P3
平成 22 年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧	P5
〔編集後記〕	
一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？	P106

I. 一日前プロジェクトの概要

「一日前プロジェクト」とは？

「一日前プロジェクト」とは、被災から一定期間を経過した被災者・災害体験者のみなさまや災害対応経験者のみなさまにお集まりいただき、「もし、災害の1日前にもどることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに、

- ① 被災直後の行動
- ② 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ③ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- ④ そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

「一日前プロジェクト」誕生の背景

わが国の経済を支える壮年層は、日々の仕事に追われ、防災教育を受講する機会や防災に関する情報に接することも少ないため、自然災害の恐ろしさを意識することなく日常生活を送っています。しかしながら、万一、大きな災害に見舞われた場合には、家屋の損壊や家族の死傷、仕事を含めた生活基盤の喪失など、経済的にも精神的にも甚大な損失を被ることが予想されています。

教育課程にある若年層の防災教育もまだ十分とは言えませんが、これら壮年層に対する防災教育の仕掛けづくりには若年層以上に難しい面があるといえます。地域のコミュニティや国民一人ひとりが日頃から災害に備えることを目的とする「**災害被害を軽減する国民運動**」の中心的な役割を果たすべき壮年層の災害に対する関心呼び起こし、防災・減災に向けた行動や、災害への「備え」をうながすきっかけになるべく、一日前プロジェクトが誕生しました。

II. 平成 22 年度実施要領

	対象災害	ヒアリング実施地区		ヒアリング対象者	ヒアリング実施時期
1	平成19年 台風第9号 (平成19年9月)	神奈川県	平塚市	住民	平成22年9月
2	東海豪雨 (平成12年9月)	愛知県	名古屋市	住民	平成22年11月
3	平成21年7月 中国・九州北部豪雨 (平成21年7月)	山口県	宇部市	行政職員	平成22年11月
4	平成22年 梅雨前線による大雨災害 (平成22年7月)	山口県	山陽小野田市	住民 企業関係者 災害支援ナース	平成22年11月
5	福岡水害 (平成11年6月)	福岡県	福岡市	企業従業員	平成22年11月
6	福岡水害 (平成15年7月)	福岡県	福岡市	行政職員 消防団関係者	平成22年11月
7	平成12年(2000年) 鳥取県西部地震 (平成12年10月)	鳥取県	米子市、 日野郡等	住民、学校関係者 企業従業員、消防団員	平成22年12月

注) 上記4、災害支援ナースの皆さまのグループディスカッションの中で、平成17年台風第14号(平成17年9月)当時のお話を聞かせていただいたため、そこから3編の物語を作成しています。

Ⅲ. 「一日前プロジェクト」のエピソードについて

「一日前プロジェクト」のエピソードは、国民一人ひとりが災害に備えることの大切さを自分の事として受け止め、それを行動に移すきっかけとしていただくためのエピソードであり、多様な場面での活用が期待されています。

「自分だったら」「我が家だったら」「我が社だったら」というように、自分の身の上に置きかえて読み進めてください。

また、最初から順番に読む必要はなく、年齢や性別、家庭や地域、職場などにおける役割など、自分と似かよった立場や境遇の方々のエピソードを拾い読みしたり、興味のあるタイトルにひかれて読んでみたりなど、自由に読み進めてください。

一つひとつの小さなエピソードから教訓などを感じてもらい、減災の大切さを知るきっかけとなれば幸いです。また、「おもしろい」と感じたエピソードは、ご家族、友人、ご近所、地域コミュニティ、職場の方々などへもご紹介ください。

平成22年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
地震・津波	目の前の車庫がない ～家を出て親戚転々～	中国	家庭	平成12年(2000年)鳥取県西部地震 (平成12年10月)	9
	下水工事の途中で地震 ～仮設に入ってようやく安眠～				10
	電子レンジが宙ぶらりん ～ポットがひっくり返って水浸し～				11
	ゲーム機、気になり、自宅に向かう ～ビー玉転がし異変知る～				12
	余震が怖くて車の中で寝る ～地震のエネルギーって、すごい～				13
	段ボールの切れ端片手に近所の安否確認		地域・近所		14
	仮設のご近所がシルバー人材仲間に				15
	家のことは二次、消防団活動				16
	消防団員の安全管理も大事 ～仲間の負傷で痛感～				17
	教習所のマイクロバスで温泉送迎 ～できる範囲で地域貢献～				18
	学校のプールの水が津波のよう ～水鳥がいっせいに飛び立つ～		学校		19
	モルタル落ち、訓練時と避難路変更 ～先生がその場で適切に判断、6年生も誘導～				20
	児童気になり、落石で危険な山道を学校へ ～いまでもその場にいなかったことが、悔やまれる～				21
	思わず窓際にへばりつく ～「机の下に」の指示も記憶なく～				22
	すごかった6年生 ～下級生守り、先生励ます～				23
	学校中に明かりつけ、地域の目印に				24
	友だちにはビデオメッセージ ～休校中に児童を訪問～				25
	「あっ、映ってる」 ～欠席の女児の安否、テレビで確認～				26
	プールの水をバケツでトイレに ～避難した若者が手分けして～				27
	おいしいちゃんと一緒に笑顔の女児 ～ポスターで地域励ます～				28
	出張先で地震発生を知る ～「肝心な時に役に立たない」と家族～				29
	化粧鏡の前で大揺れ ～割れずにつけがせず良かった～				30
	重いキャビネットが落下寸前 ～立ち尽くすだけで何もできず～				31
	教習コースに水噴き出す ～まるで小さな噴火のよう～		企業・職場		32
	車がみんなでダンスを踊っているよう				33
	Yシャツ姿でつるはし、スコップ ～一気に仮復旧し、翌日営業再開～				34
道路のセンターラインまたいで運転 ～地震の揺れで道路は「かまぼこ」みたい～	35				

平成22年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
風水害	博多駅前是一片の泥の海 ～通勤客は靴を片手に、水の中を歩く～	九州	企業・職場	福岡水害 (平成11年6月)	36
	アクセル踏みつづけ、必死の運転 ～車はマフラーに水が入ったらおしまい～				37
	危険を知らせる人たちを、『お客さん』と勘違い ～水溜まりに突っ込みエンジンストップ～				38
	大雨の中の運転はプロでも命がけ ～経験と判断で身を守る～				39
風水害	避難場所ってどこだっけ？	中部	家庭	東海豪雨 (平成12年9月)	40
	ホームセンターの屋上に避難				41
	前の晩「おかしいね」と言いながらいつものように就寝				42
	おばあさんが備えておいた缶詰で助かる				43
	地震対策の突っ張り棒が水害でも生きた				44
	2階に避難して正解 ～分かっていたならもっと準備をしていたのに～				45
	水害はドコの災害 ～後始末に四苦八苦～				46
	大事な楽器は実家の2階に避難 ～気づいた時にはマンション水没～		47		
	食べ物をもらいに 胸まである泥水の中を歩く若者		48		
	女性が一番困ったのはトイレ		49		
	水没した車に当たりながら進んだ救援ボート		50		
	1軒、1軒叩き起こして「避難してください」		51		
	小学校へ避難途中で福祉施設へ緊急避難		52		
	災害時の助け合いは普段のつき合いがあつてこそ		53		
	地域で緊急避難場所の提供を考えよう		54		
必死で喫茶店のゴミ出し、清掃 ～水害後13日ぐらいで店再開～	55				
風水害	これは危ないぞと思えば… ～4年前の水害経験踏まえ～	九州	地域・ご近所	福岡水害 (平成15年7月)	56
	網の目フェンスにゴミが詰まって水はけず ～まるでビーバーのダムみたい～				57
	流れの速い川には近寄るべからず ～消防団員の経験から言っておきたいこと～				58
	消火栓でヘドロを洗い流す ～二次災害防止で分団と地域が決断～				59
	水が出てからじゃ、逃げようと思っても逃げられない ～地域で声かけ、早めの避難が大事～				60
	地域に頼られる消防団 ～これからは若い人の力にも期待～				61
	土のう積みは消防団が災害出動。片づけは住民の手で ～役割分担を理解して～				62
	100メートル以内、すぐに行ける避難場所が欲しい ～近くのアパートやビルを事前に指定～				63

平成22年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
風水害	止水板の設置で地下浸水を未然に防止 ～浸水すれば大被害、排水も困難に～	九州	地域・ご近所	福岡水害 (平成15年7月)	64
	止水板でどうにか被害食い止める ～4年前の水害の経験生かし早めに準備～				65
	地下浸水防止は地域ぐるみで ～駅周辺のビルと連携、訓練も～				66
	駐車場にたまった水が店を突き抜け地下鉄の駅へ ～水の力つてもすごい～				67
	地下鉄入口の止水板設置のタイミング ～お客さまに不便をかけたくないと悩む～		企業・職場		68
	地下鉄の軌道内に水が入ったら大変 ～必死の作業で、翌日運転再開～				69
	漏水がお客さまの頭に落ちないように徹夜で作業				70
	エスカレーター上の天井からドッと水が! ～見えないところに水害の余波～				71
風水害	ボランティアを受け入れてもらうのも大変 ～お年寄りの警戒心高く～	中国	地域・ご近所	平成17年台風第14号 (平成17年9月)	72
	高校生を話し相手に笑顔のおばあちゃん ～集落総出でボランティア～				73
	入れ歯流され、体調こわすお年寄り ～同じ目線で気持ち汲みとる～				74
風水害	「避難勧告」発令で、企業の社宅に避難 ～地域応援協力がさっそく生きた～	関東	地域・ご近所	平成19年台風第9号 (平成19年9月)	75
	避難勧告が出て夜中に避難 ～解除まではと120人が集まる～				76
	「とりあえずの避難」でも、必需品は持参して ～夏でも必要だった毛布～				77
	「避難勧告」を知らせても、誰も避難しなかったアパートの住民				78
	「避難勧告」ってどこから来たの? ～情報の出所わからず、どうしてよいか迷う～				79
	「避難勧告」発令で、手ぶらで避難した住民 ～貴重品などは持参するべきと反省～				80
	とっさの機転、「広報車のマイクを2階に向けて!」				81
	避難の経験が地域の人を結びつけた ～若いお父さん、お母さんも地域の活動に参加～				82
風水害	前もって避難の方向を決めていた ～山崩れに迷わず避難、命助かる～	中国	家庭	平成21年7月中国・九州北部豪雨 (平成21年7月)	83
	受話器を置いた途端にまた電話 ～1本の木が倒れても何件も通報～		企業・職場		84
	1軒ずつ1被害現場を確認 ～職員の経験と土地勘でカバー～				85
	水害対応は長期戦				86
	避難勧告発令の難しさ ～空振り率が上がれば勧告の価値下がる～				87
風水害	「来る、来る、来る」路地はまるで川のように ～川の氾濫の大変さ実感～	中国	家庭	平成22年梅雨前線による大雨災害 (平成22年7月)	88
	土のうが必要になるなんて夢にも思わず ～今までの経験が裏目に～				89
	被災者への声かけにも心配る ～気持ちが通じた時に小さな喜び～		地域・ご近所		90
	「休んでね」と言ってる自分が休んでない ～ボランティアもスタッフもついつい熱中しがち～				91

平成22年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災 害	ページ
風水害	軽装での復旧作業は危険がいっぱい	中国	地域・ご近所	平成22年梅雨前線による大雨災害 (平成22年7月)	92
	ボランティアの健康管理にひと役 ～災害支援ナースは、被災者にも勇気を～				93
	ボランティアさんの熱中症対策に気を配る ～素足にサンダルは、破傷風の危険～				94
	マンホールに片足パコーン ～泥水で蓋が浮いているのに気づかず～				95
	重い長靴を引きずって歩く ～軽い長靴、あったらいいな～				96
	「まさか」が現実に ～駐車場水没で大損害～				97
	災害はどこでも起こる ～土地のかさ上げも自然の力の前では無力～		98		
	前年の被災を教訓に連絡体制を整備		99		
	物の上げ下げもルールを決めてスムーズに		100		
	紙おむつがフカリフカリ ～水の浸入防ぎきれず～		101		
	経験踏まえ、復旧業者を早めに手配 ～従業員のケアも忘れずに～		102		
	1階のお年寄りはずっくり2階へ ～情報収集して早めの判断～		103		
	『災害支援ナース』に欠かせない病院と家庭の理解		104		
	床張りから壁のペンキ塗りまで全部自分たちで ～被災を機に新しい店で再出発～		105		
		企業・職場			

平成 22 年度「一日前プロジェクト」
エピソード集

目の前の車庫がない

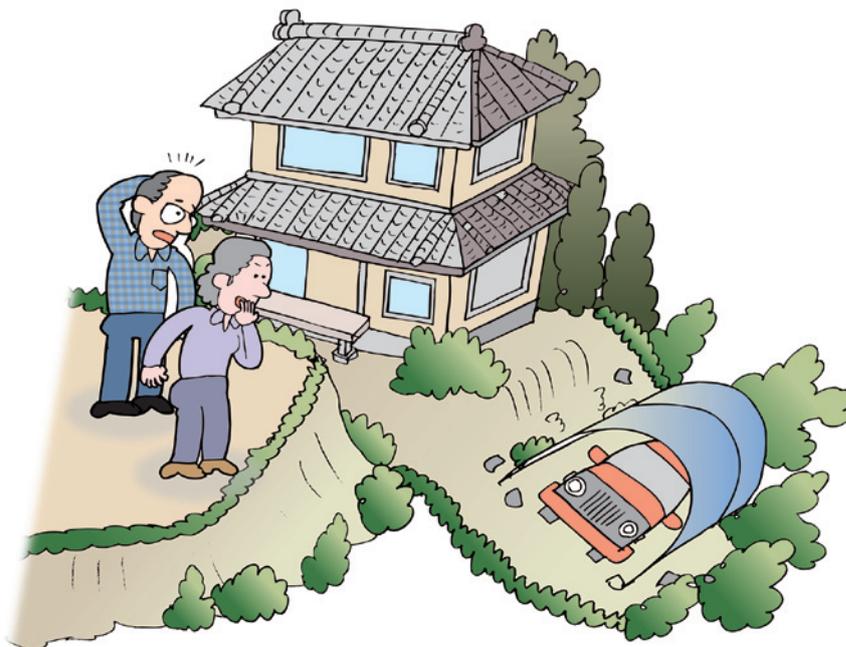
～家を出て親戚転々～

(鳥取県日野町 80代 男性 農業)

当時私は70才。取り入れも済み、いっぱい飲んで百姓家の一番いいところの南向きの部屋で昼寝をしてたら、ドドドドと地震がきました。ちいとおさまって、やれやれと窓の外を見たら、いつもの風景とどこか違う。で、あわてて起きあがってみると、家のヘリにある車庫からドッと地面が崩れ落ちていたんです。これはどえらいことだということですね。

明るる日に自衛隊が来て、土のうをデッデデッと積んで、土地がくずれんようにしてくれたけど、その日自動車で一晩明かしてからは、ばあさんと2人、親戚のところを転々と泊まり歩きました。しまいには、山が崩れたのでうちのところは『危険地帯』ということになり、どこか屋敷を探して出て行くようにと言われました。

そう言われても先祖代々の田んぼを捨てるわけにはいかんし、結局、いろんな人の世話になって、息子と連名で金を借りて、別の場所に新しい家を建てました。実際はわしが年金から戻しとるから、年取った身にはつらいもんがあります。



下水工事の途中で地震

～仮設に入ってようやく安眠～

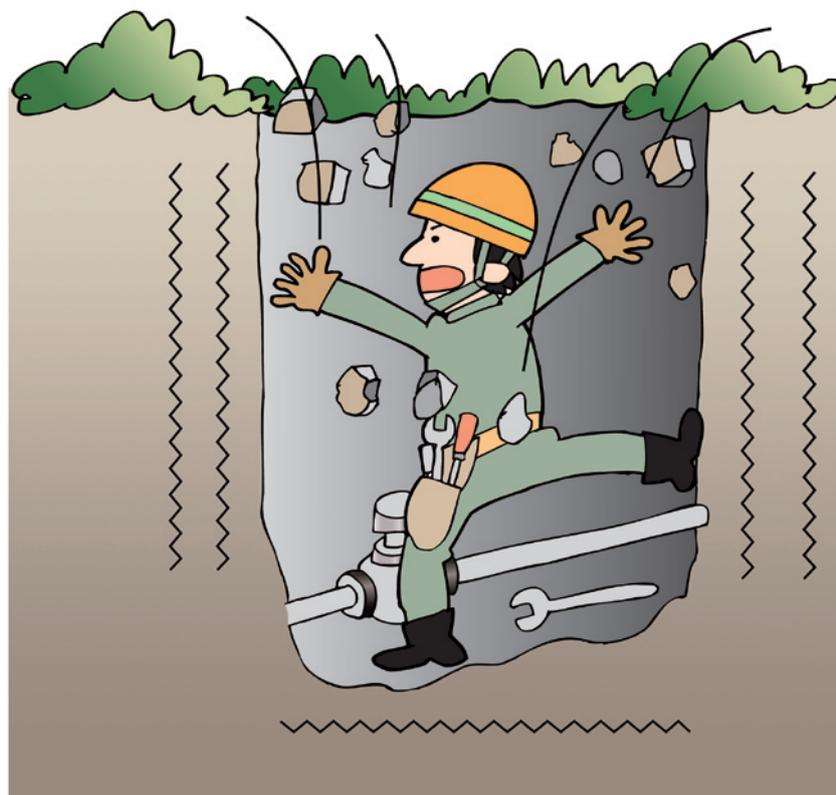
(鳥取県日野町 70代 男性)

あの日、私は土木作業員として、下水工事をしていました。1m90センチぐらいまで掘って、配管をして、半分埋めたところで穴の中に入り、押さえをやっているところに地震がきて、必死で壁につかまっていた。一步間違えば大変なことになっていたと思います。

道路を埋め戻して帰らないといけなのに、地震の影響からか、土を載せたトラックが来ない。しかたなく、隣に置いてあった工事した泥で穴を埋めて帰りました。

地震後の建物検査で、「家に入っちゃいかん」という判定が出てから、避難所に行きました。でも、電気が皓々として寝られず、次の日は自動車で夜を明かしましたが、今度は雨のバタバタという音が気になって寝られませんでした。で、自分の家に帰り、すぐに出られるように枕元に履き物をおいて、寝ることにしました。

2階の土壁が落ちているほどでしたから、仮設住宅に入れた時は本当にホッとしました。



電子レンジが宙ぶらりん

～ポットがひっくり返って水浸し～

(鳥取県日野町 70代 女性)

公園で仲間7、8人とグランドゴルフの練習をしていた時、「何かおかしいな」と感じた瞬間、すごい地震が来ました。電柱が揺れて、電線がスワツ、スワツと音をたてて動いてね。みんな30分ぐらいその場にしゃがんでいるままでした。

我が家に着くと、戸が開きません。裏の戸もだめで、主人が帰ってくるのを待っていました。主人の顔を見た時にはホッとしましたね。

玄関を開けて入ると、柱がずれ、台所の電子レンジがアース線にぶら下がって、宙に浮いている状態でした。食器もすべて落ちて床に散乱し、ポットがひっくり返って一面水浸しでした。地震はよその事とっていましたから、信じられない光景でした。

家の中は危険でいられないし、小さな孫を連れて行くのは無理ということで、家の車庫に避難することに決めました。車庫の車を全部出すとかなりのスペースがあるし、ちょうど1週間前に電気のコンセントを設置していて便利もいいし、シャッターもあったので、車庫で1週間ほど生活しました。とにかく家族と一緒にいられたことだけは、良かったなと思います。



ゲーム機、気になり、自宅に向かう

～ビー玉転がし異変知る～

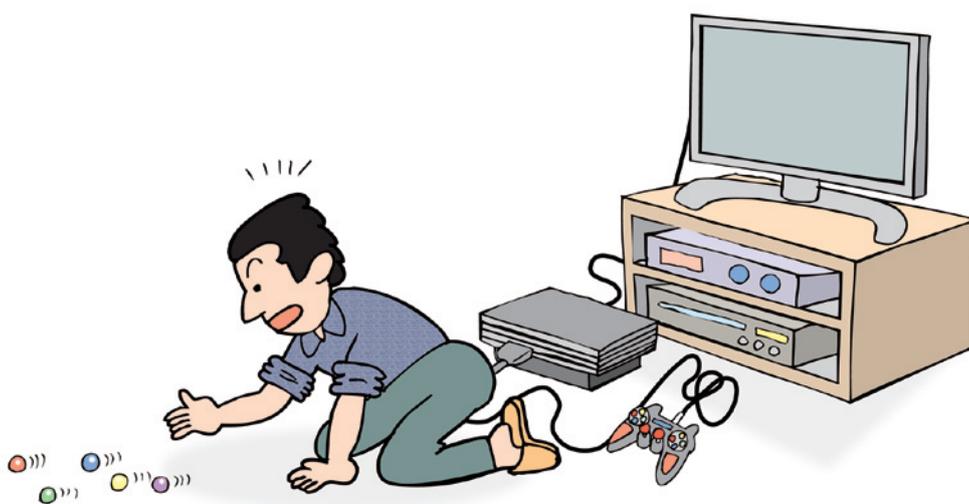
(米子市 20代 男性 自動車学校職員)

ちょっと恥ずかしい話ですが、当時僕は就職して初めてもらったお金でかなり高いゲーム機を買ってしまって、職場で地震の復旧作業をしている間も、「これはやばい。潰されているかも」と心配でたまりませんでした。そのゲーム機は社宅の僕の部屋のテレビの前に置いてあり、テレビ台が古くてグラグラしていたからです。

「社宅のこともあるけん、ちょっと1回戻ってこい」って誰かに言われて、これ幸いに家に向かいました。ドアがなかなか開かずにあせりましたが、「入らんとどうしようもない」と全力でドアを開けました。運良くテレビは落ちてなくて、ゲーム機は無事でした。

しばらく部屋の中で壊れたものがないか探していると、気持ちが悪いというか何だか感覚が変なんです。「おかしいな、まさかな」と思ってビー玉を床に置いたら、コロコロコロって転がっていきました。地震のせいで床が斜めになっていたんです。

結婚した後も同じ社宅に住んでいますが、今は転倒防止用ワイヤーでテレビが前に倒れないようにしていますし、子どももできたので、高い所には重たいものや硬いものは置いていません。



余震が怖くて車の中で寝る

～地震のエネルギーって、すごい～

(鳥取県南部町 50代 女性 百貨店職員)

地震後1時間ぐらいには閉店ということになりましたので、とにかく家路を急ぎました。

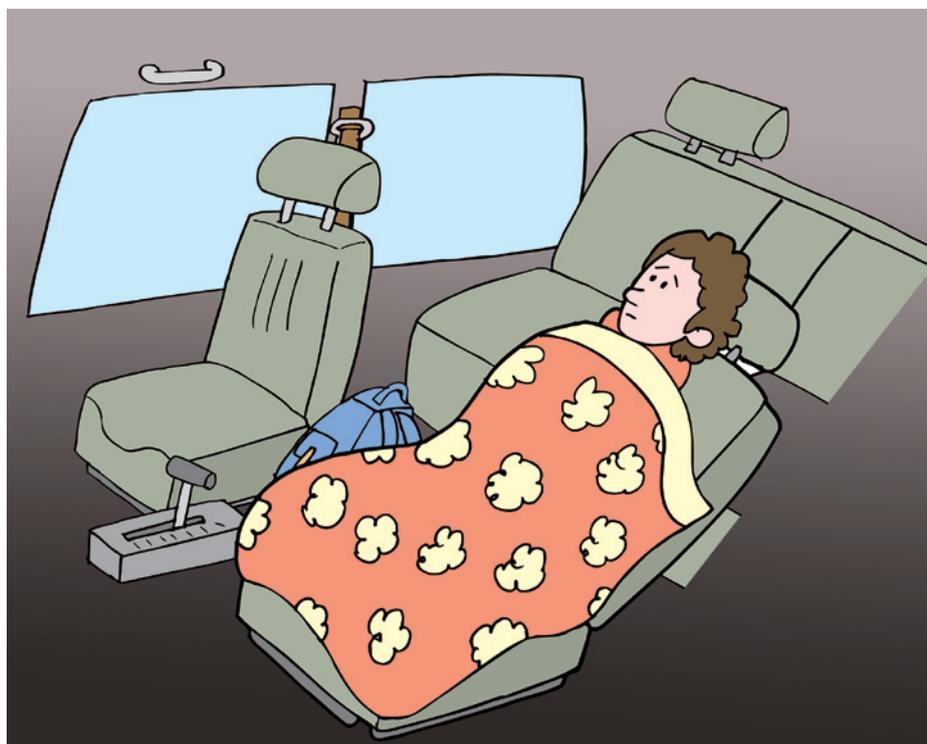
家に入ると大変なことになっていて、台所は足の踏み場もないくらい茶碗とかが割れて散乱していました。食器棚は倒れてはいませんが、観音開きの戸が開いて、中のものが全部飛び出してしまったのです。

私が住んでいる南部町は、店のある米子市内より震源に近かったせいか、屋根がずれ、瓦は落ち、壁にはひびが入り、庭の小石は波打っていました。「あ、すごいエネルギーだ」って思いました。

その後も本当によく揺れました。震度3ぐらいの余震もあって、私は恐ろしくて家の中にいるのが怖くて、怖くて。その日の夜からしばらくは部屋で寝ることができず、外の車の中で寝ていました。

そんな中、皆生温泉がお風呂を解放してくれたり、自衛隊の方が後片づけをしたり、水を持ってきてくれたりしたのは、すごく助かりました。

その時の経験から今では、食器棚を横開きのもの買い換えています。



段ボールの切れ端片手に近所の安否確認

(鳥取県日野町 70代 男性)

隣町で仕事をしていて、「何だかゴロゴロいうな」と思っていたら、地震でした。気持ちを落ち着かせようとタバコを数本吸って、急いでやりかけの仕事を終えて、車で町に向かったけれど、途中の石垣が崩れて通れず、車を置いたまま歩いて帰りました。

家に戻ってから、家内に頼まれて保育園にいる孫を引き取り、小学校に連れて行って、午後7時過ぎまで預かってもらって、小学生の孫と一緒に家に連れて帰りました。

午後の8時ごろ、地域の皆さんがどこに避難しているか各戸を回って安否確認をしようとしたら、書きとめる紙がなくてね。家の中はガタガタで入れないし、結局、近くの酒屋さんから段ボールをもらって来て、それを破って、家内と2人、上から下まで回りました。

その晩は一睡もせずに、区域内を巡視して周りましたが、それは消防団のOBとして自発的にやったことです。災害が発生した時に行方不明の人が出ないようにすることが一番大事ですからね。



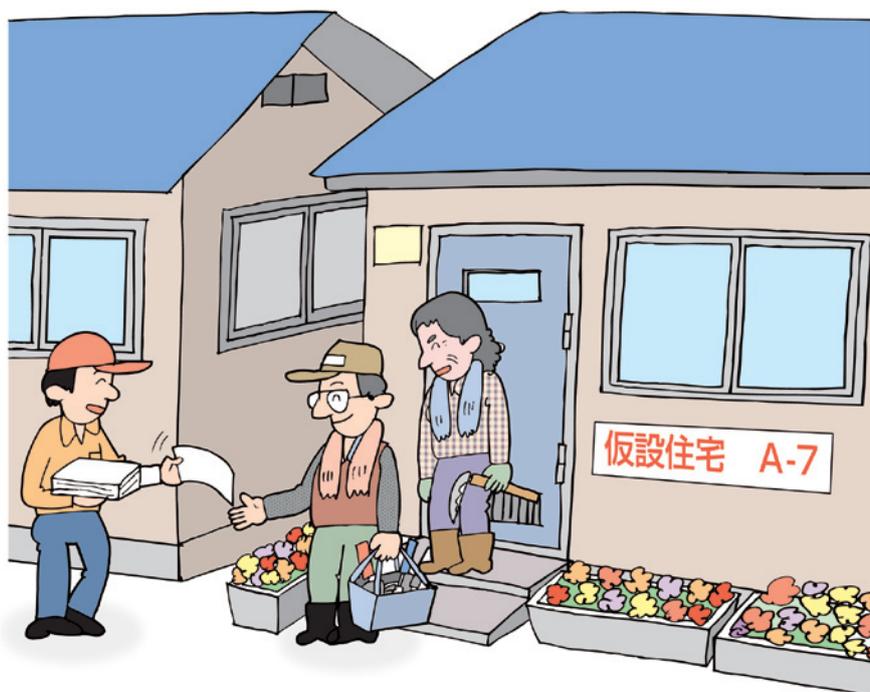
仮設のご近所がシルバー人材仲間に

(鳥取県日野町 70代 男性)

地震後しばらくして、仮設住宅に入りました。自分が昔役場におった関係で、「自治会長みたいなことをしとうせ」ということで、連絡用のビラを配ったり、みんなの意見を聞いたりという役目をしていました。

良かったのは、町中のものだけじゃなくて、農業をやっている生産者も入り混じって、仮設に入ったことですね。町のものだけじゃできないことも農家の人と一緒にやればわけなくできる。そういう気持ちで仲良く過ごせました。おかげで、仮設で知り合った人たちとは、シルバー人材センターの仲間として、今でも一緒に働いています。

ただ、新築して家に帰ったけれど、タンスに転倒防止のベルトをつけているかというと、悲しいかな、つけてない人が多いのです。うちはちゃんと転倒防止をしているし、あれから10年になりますが、毎年ナップサックの中のものを取り替え、それを背負って訓練に参加しています。地震の恐ろしさを忘れてはいけませんよ。



家のことは二の次、消防団活動

(鳥取県南部町 40代 男性 消防団員)

事務所が禁煙になっていたのので、外でタバコを吸っている時に、グラッと揺れました。池の水が外に溢れ出るぐらいの強い揺れで、すぐには歩き出すこともできませんでした。

食堂にかけてあった賞状とかも全部下に落ちて、「これはえらいことや」と。それでも全員無事が確認できたので、「一旦帰って、家を確認してきてください」ということになりました。

家に戻ると、隣の家のひさしが落ちたり、道の奥の方の石垣が崩れたりはしていましたが、思ったほどの被害はなく、会社に無事だったことを報告しました。

私は消防団員ですから、分団の役割が「給水」ということになって、井戸から給水ができるように工事したり、自衛隊の車に乗って水を配ったりしていました。

夜も消防車のエンジンをかけたままで明かりをとり、食事はおにぎり程度で、夜中に家に帰って寝るだけという毎日でした。家のことは何もできませんでした。消防団員としての責任は果たせたかなと思っています。



消防団員の安全管理も大事

～仲間の負傷で痛感～

(鳥取県南部町30代 男性 消防団員)

私は大山町の職場で地震に遭いました。机に手をついて倒れないように踏ん張っていたほど、経験したことのない揺れでした。すぐにテレビをつけると、「震度6強」という数字が出たので、職場にいた西部地区のみんなと同じく、家に向かいました。

父母は家の外の車の中に避難していて無事でした。電話が通じなかったのは、外にいたせいだったのです。ホッとしたところで、すぐに消防団の服に着替えて役場に行きました。

うちの分団は、水源地から水を汲んで、救援に来た自衛隊の給水車に水を入れる作業をしていましたが、仲間のひとりが誤って背丈ぐらいある水路に落ちて、肋骨が折れるほどのケガを負いました。暗くて辺りがよく見えず、後ずさりしてそのまま落ちてしまったようです。安全管理が足りなかったなと思いました。

家の修理やテントがけは、両親にすべて頼みました。とにかく消防に出んといけんという意識しかなくてね。親も納得してくれていたと思います。



教習所のマイクロバスで温泉送迎

～できる範囲で地域貢献～

(米子市 60代 男性 自動車学校職員)

地震後1週間以内だったと思いますが、山奥の町で被災されたひとり暮らしのお年寄りたちが公民館に避難したのはいいけれど、お風呂も入れないし炊き出しで生活しているということを聞きました。

当時、皆生温泉旅館組合が温泉施設を無料開放したり、炊き出しをしたりされていたのですが、そのお年寄りたちを皆生温泉へ連れて行って、お風呂へ入れてあげて、あったかい食事をしてもらうというボランティアに協力してもらえないかという依頼がきたのです。

トップと、「こういう依頼が来ているけど、バスを出していいですか」という話をしまして、「誰が運転する?」、「いや僕がします」ということで、2日間ほど私がマイクロバスを運転してお年寄りの送り迎えをやりました。

ゆっくりお風呂に入って、座敷で用意された食事をとったお年寄りたちは、とても喜んでおられました。



学校のプールの水が津波のよう

～水鳥がいっせいに飛び立つ～

(鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者)

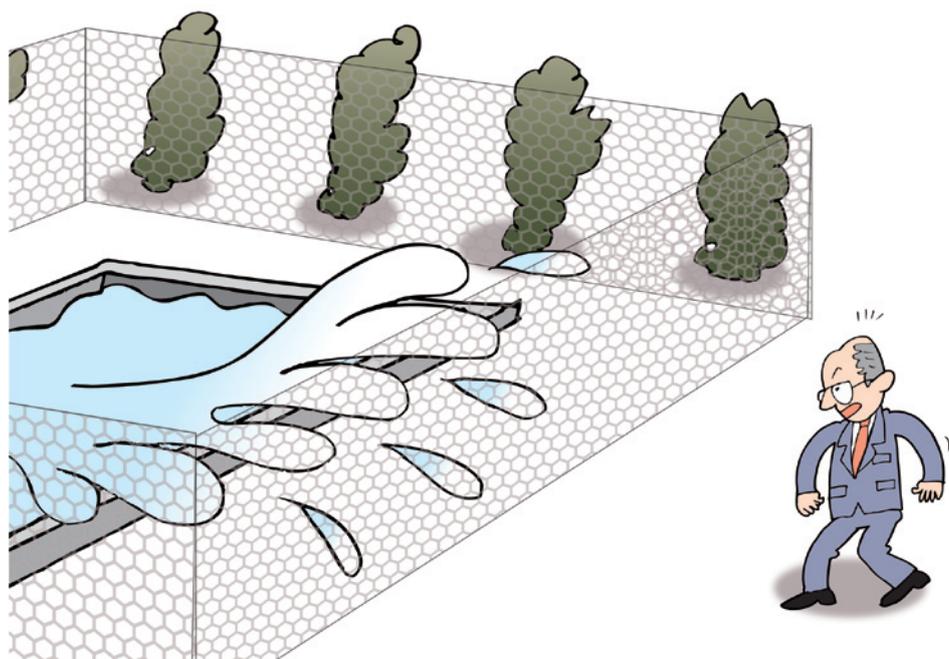
当時私は中学校の教頭をしまして、昼食を終えた後にぐるりと校舎を回るのが仕事でした。その日も外に出たら、グラリと来たもんで、「あらっ？」思ったら、そのうちドドドドドと揺れが大きくなって、プールからまるで津波のような感じで水があふれ出たのです。

近くのテニスコートまでダーっと飛びましたからね。地震の揺れと水が共振したせいであれだけの大きなうねりになったのだろーと思っておりますが、あっけにとられていて、その時どんな音がしたのかは記憶にありません。

ただ、揺れたとたん「ギャー」という声でしたので空を見上げると、ものすごい数の鳥がいっせいに飛び立っていきました。近くの河川敷におしどりや鴨が来とるんですが、きっと異常を察知したのだろーと、後になって思いました。

我に返ると、校舎の方からも「キャー」という声が聞こえて、「全員外へ集合」と言いながら、教員が走り回っているのが見えました。

しばらくすると、生徒全員が無事に避難してきたので、ホッとしました。



モルタル落ち、訓練時と避難路変更

～先生がその場で適切に判断、6年生も誘導～

(鳥取県日野町 60代 男性学校関係者)

掃除の時間、立っておれないほどの揺れがきたので、校長として校内放送で避難を呼びかけるよう指示を出したところ、「電気が来ていないので、放送ができません」という返事。

「これは大変だ」ってことで、各階それぞれの掃除場所に教員が付いていますので、1階のものが2階、2階のものが3階へと、大きな声で「校庭に避難せよ」と伝えました。

ふだん、避難経路は体育館の出口から出て校庭に集まるという訓練をしとったわけですが、体育館の出口の上にあるモルタルの壁が落ち、体育館の周りに突き刺さっている状況を見て、体育館にいた職員が「だめだ、本館に帰れ」と言って、職員玄関から校庭に出る形にしたわけです。

また、中庭にいる児童も訓練どおりに体育館に向かってきたのですが、そこにいた6年生が「ここは危険だからそのまま校庭に行け」と下級生に指示を出してくれたそうです。

ふだんは授業中を想定した訓練が多いのですが、いつ起こるか分からないということで、時々放課後とか休憩時間という形で訓練をしていたことが生かされたというか、状況に応じてとっさに判断した教員や誘導してくれた6年生のおかげで子どもに事故が無く、本当にありがたいなと思いました。



児童気になり、落石で危険な山道を学校へ

～いまでもその場にいなかったことが、悔やまれる～

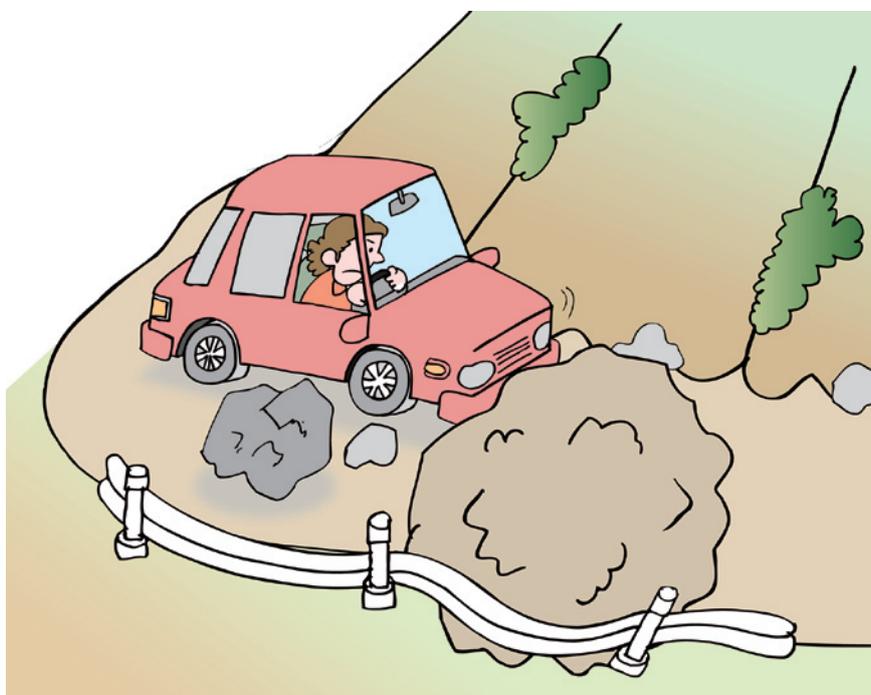
(鳥取県日野町 60代 女性 学校関係者)

あの日、私は休暇をもらって、倉吉の駅に大変お世話になった方を見送りに来ていました。電車を待っていると、何ごとかと思うほど揺れました。駅の放送は無かったけれど、とにかく大変なことが起こったということだけは分かりました。

すぐに学校へ向かいましたが、どこを行っても渋滞で車が動かず、しかたなく山道を通ることになりました。地震で落ちてきた大きな岩のすぐ脇を通る時はすごく怖かったけれど、ともかく学校に帰らなきゃという思いで、必死で運転しました。

学校にたどり着くと、6年生の女の子がいきなりしがみついてきました。途中、電話で「全員無事に校庭に避難」とは聞いていたけれど、やっぱり子どもたちの無事な姿をみて、抱き合っって初めて安心しました。

その時の喜びをはっきり覚えています。学校を預かる者として、どういう理由であれ、その場にいなかったということを今でも悔やんでいます。



思わず窓際にへばりつく

～「机の下に」の指示も記憶なく～

(鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者)

掃除の時間、校長室前の廊下で、いつものように子どもたちと一緒に掃除をしといたら、地震が来ました。立っておれないほどのすごい揺れでね。すぐ窓ガラスにへばりつきました。本来なら窓ガラスは危険だから離れなければならないのにね。

子どもたちもその場でしゃがんだり、壁にへばりついていたりしていたんだろうと思うけれど、良く覚えていなくてね。

後日、「校長先生の声が一番大きくて、『机の下にもぐれ!』って言いなつた」、「自分はそれだけをはっきり覚えている」という子どもがおると取材の方から言われました。

自分がいたのは廊下ですから、近くの教室におる子どもたちに言ったのかも知れませんが、僕には全然記憶がないですよ。「避難せえ!」、「机の下にもぐれ!」という声を出したかも覚えていません。もうパニックになつとつたということでしょうね。



すごかった6年生

～下級生守り、先生励ます～

(鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者)

校庭の向かい側にある岩山が、地震とともにガラガラと音を立てて崩れ、大きな石が校庭まで飛んできました。石が校庭に落ちると砂ぼこりがバーッと舞い上がり、まるで学校の方にどんどん向かってくるような感じになりました。

それを見ていた1年生、2年生が泣き出したので、養護の先生に対応をお願いしようと思っていると、6年生の女子がその泣きじゃくっている子を、「大丈夫、大丈夫」って言いながら抱えてやっていたのです。

6年生といえばまだ子どもですわね。それが自発的に下級生をかばい、勇気づけている姿に感動しました。

全校生徒が126人ぐらいの小さな学校で、1学年1クラス。運動会とか掃除とかもみんな縦割りで活動してますし、毎日の登下校時には6年生が先頭と最後に立って、下級生と一緒に学校に通っています。そういうことが、いざという場面で生かされたんだなっていう気持ちですね。



学校中にあかり付け、地域の目印に

(鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者)

地震後に校庭を開放しました。周辺の人が避難してきた時のための仮設トイレを設置してもらい、校庭を避難場所として使ってもらうことになったのです。校庭はボランティアの休憩場所や資材置き場にもなりました。

車に乗って、「今夜寝させてくれ」という人がやってきましたし、「家族が避難所におると聞いたけれど、ここじゃありませんか?」と、安否確認にくる人もいました。

そこで、一晩中、3階建ての校舎の全部の教室に電気をつけておくことにしました。明かりをつけておけば、「職員がおるんだよ」ということになるし、「誰でも来られた方には対応しますよ」というメッセージを伝えようということですね。

やっぱり暗くしていたら近所の人にも来られないですよ。道路も大変な状況になっていて、どこに行ってもいいかわからない人たちの「灯台」になれたらという気持ちでした。



友だちにはビデオメッセージ

～休校中に児童を訪問～

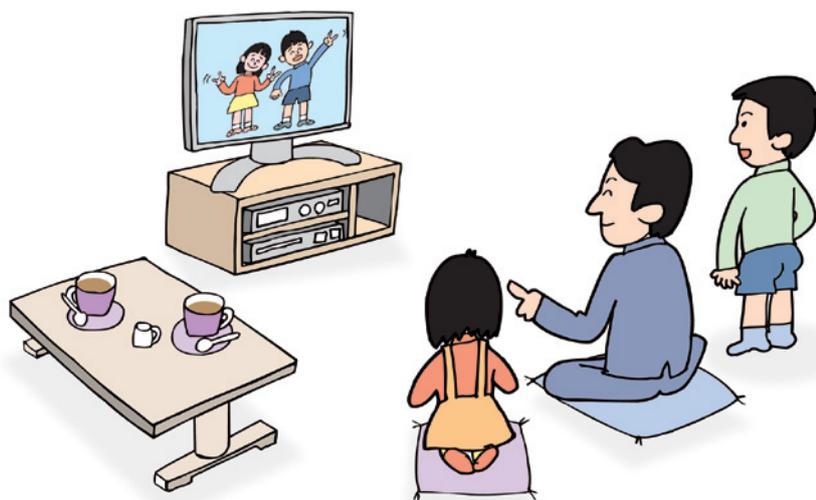
(鳥取県日野町 60代 女性 学校関係者)

地震が起きたのが金曜日で、次の日の土曜日には家庭訪問をしました。学用品を置いたまま家に帰っていますからそれを届けて、家庭がどんな様子なのかを聞き、通学路の点検をしました。

臨時休校の間は、毎日のように電話で「今、どんなことをしてる?」とか「どんな気持ち?」「お風呂に入れてる?」「心配なことはない?」というふうなことを聞きました。なんせ生徒が少ないですからね。家庭訪問も毎日のようにして、時には勉強してる子と一緒に課題を考えたりもしました。

それから、「友達へメッセージを持って行こう」ということで、子ども達の様子をビデオに収めて、みんなが元気になっているよということを知らせて回りました。

阪神・淡路大震災で心のケアが問題になりましたから、先生方もそのことを意識して行動していたと思います。



「あっ、映ってる」

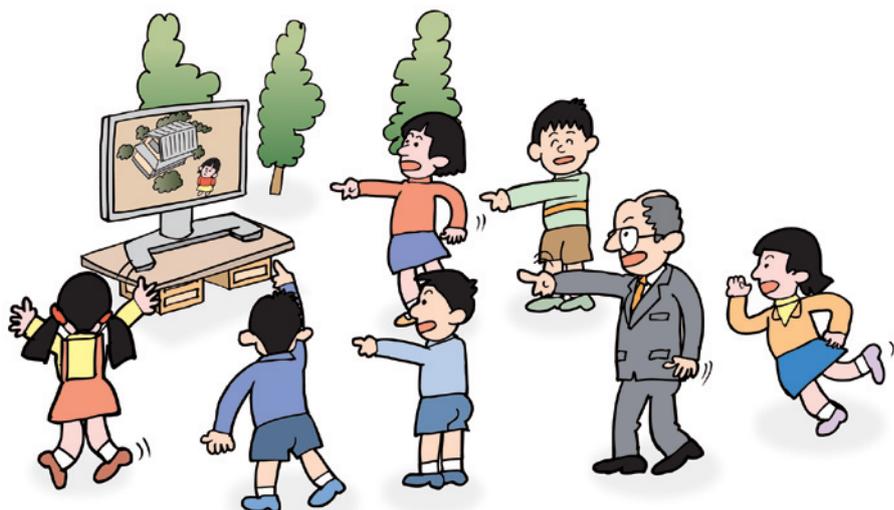
～欠席の女児の安否、テレビで確認～

(鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者)

地震後真っ先にしたのは、子どもの安全確認でした。保健室とかトイレとかは、ふだんから出て行くときには最後にチェックして出るようになっていたので、校庭に避難した児童に問題はありませんでした。ただ、その日は欠席者が5名おったので、校長の私は、その子どもたちの安否確認を先生方に指示しました。

学校の電話も携帯も通じなかったので、神戸の震災のときに公衆電話が一番有効であったという話を思い出し、児童玄関前の公衆電話を使って、家なり、家が出ないときには近所に電話をして確認させたところ、5名のうち4名は確認できましたが、残りの1名がどうしても確認できず心配していました。

ところが、職員が職員室から持ち出して校庭に向けていたテレビに、ヘリコプターからの映像が流れ、その欠席の子どもが映ったのです。「あ、映ってる!」と子どもたちも大騒ぎになりました。聞けばその子の家は一瞬にして潰れたけれど、中で寝ていたお父さんは屋根の角度の空間に救われたとのこと。安心するとともに、命の不思議を感じましたね。



プールの水をバケツでトイレに

～避難した若者が手分けして～

(鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者)

うちの学校が避難所になり、皆さん毛布などの荷物を自分の自動車で運んできました。困ったのは、体育館の水洗トイレの水が出なくなってしまったこと。地震の揺れで、体育館の周りの土が下にズリ落ち、そこに埋めてあった水道管が切断されてしまったのです。

で、校庭のプール水をバケツで汲んで来て使うことになり、避難していた若い人5、6人に、「絶えず水の入ったバケツをここに置くようにしてください」と頼みました。

1日目は良かったんですけど、2日目ぐらいからトイレが詰まりだしました。皆さん夜中は緊張して寝られんから、結構便所に行かれるんですよ。それに、おばあさん方はロールペーパーを使わずに、自分のちり紙を使うものだから詰まってしまうのです。

3日目ぐらいから体育館のトイレは使用禁止にして、校舎の2階、3階のトイレを使ってもらいました。お年寄りには、「階段を上るのが大変なら、トイレのそばの教室で寝てください」と伝えました。避難所になっている体育館は、せめて水道管が地震で抜けないように備えておくべきだと強く思いましたね。



おじいちゃんと一緒に笑顔の女児

～ポスターで地域励ます～

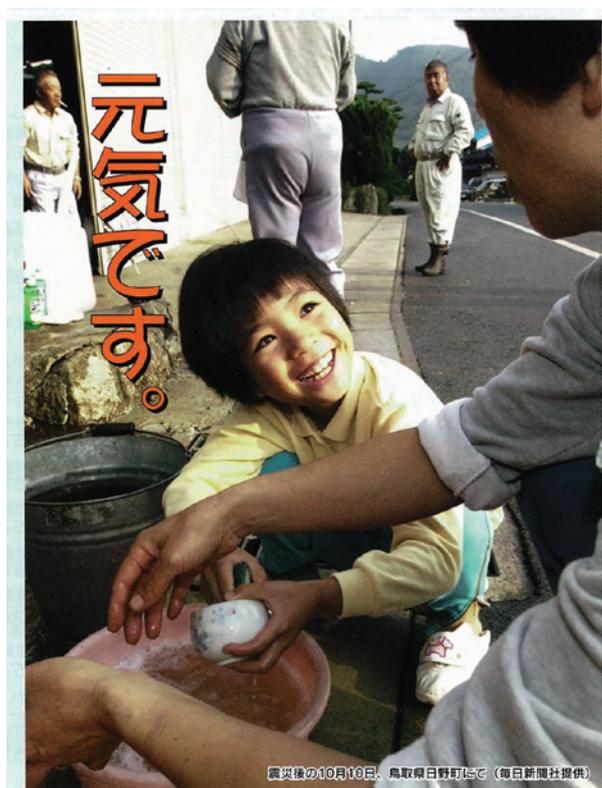
(鳥取県日野町 60代 男性 学校関係者)

学校再開の日、子どもが教室に来たときに誰もおらんじゃ寂しいもんだから、担任がおるようにしました。「校門とか通学路はほかの教員でやれるけど、教室には担任がおらないかん。子どもにとって我が家だよ」と言ってね。

1週間ぐらいは特に集団遊びを入れましたが、子どもたちは「校庭が割れる夢をみていけん。自分がその底に落ちていくような夢をみる」などと言っていました。きっと、近くの岩山が崩れたときの衝撃がすごかったんだと思います。

「不安だ、不安だ」って言いよる子どもたちには、カウンセラーの方や地域の人たちから声をかけてもらい、少しずつ元気を取り戻していきました。

そんな中、2年生の女の子がおじいさんと一緒に地域ボランティアで茶碗を洗つとる写真が報道され、それがポスターになって、街のいろいろなところに貼られるようになりました。女の子の笑顔がとても自然でね。子どもが安心してその地域の中で生活できていることが伝わってきて、すごく感動して、元気をもらったような気がしました。



震災後の10月10日、鳥取県日野町にて(毎日新聞社提供)

鳥取県ポスターより

出張先で地震発生を知る

～「肝心な時に役に立たない」と家族～

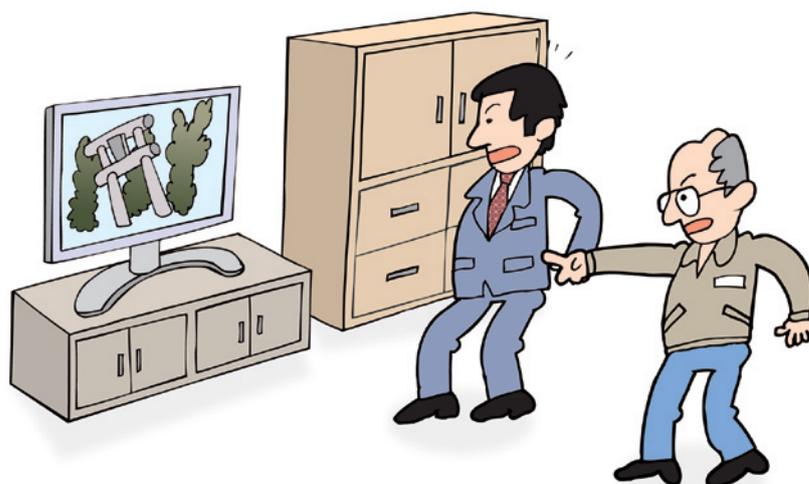
(米子市 40代 男性 百貨店職員)

僕は地震の前の日から大阪に出張していました。事務所に戻ると、「出雲大社の分院が壊れたぞ」って言われてましてね。そこには僕も行ったことはないけれど、大きなものらしくて、「仕事なんかせんで、はよう帰れ、はよう帰れ」って大阪の連中に言われ、予定を切り上げて帰ることにしました。

「どないしてんのかな」と家族のことが気がかりでしたけれど、電話がつながりません。かろうじて店と店を結ぶ内線電話がつながったので、「新幹線や在来線も止まり、道路も通行止めで、今のところ帰る手段がありません」とひとまず報告しました。

しばらくして、誰かが「米子行き的高速バスが夕方の6時半に出る」と教えてくれましたので、それに飛び乗りました。通常なら3時間半ぐらいのところを6時間ぐらいかかり、おまけに途中で降ろされて国道を歩き、やっとの思いで家にたどり着きました。

家族は全員無事でした。茶わんやコップが割れた程度でホッとしましたが、同居の父も出張中で、深夜に帰宅した私を見て、家族から「我が家の男は全く肝心なときに役に立たん」って言われました。サラリーマンの辛いところですね。



化粧鏡の前で大揺れ

～割れずにけがせず良かった～

(鳥取県南部町 50代 女性 百貨店職員)

昼休憩が終わるころ、職員用の化粧室の大きな鏡の前でみんなズラッと並んで化粧直しをしている最中にグラッと来ました。「そんなたいしたことはないだろう」と一瞬思ったんですけど、その後すぐに大きいのがグラグラッと来たので、動くこともできずにしゃがみこんで、女性ばかりですから、ただただキャーキャー騒ぐだけでした。

落ち着いてから自分の持ち場の事務所に入ると、立て掛けてあった鏡がひっくり返って割れていたのですが、そのときに初めて「さっきの鏡が割れなくてよかったな」と思いました。

あれが全部割れてこちら側に倒れていたら、きっと大変なケガをいただろうということで、みんなで「よかったね」という話をしました。

当時店内は、お昼時でそれほど混んでいなかったこともありますが、建物の中の方が安全だという意識がお客さんにも従業員にもあって、大した混乱もなかったことは幸いでした。



重いキャビネットが落下寸前

～立ち尽くすだけで何もできず～

(米子市 20代 男性 自動車学校職員)

その日の朝は普通通りマイカーで出勤。当時僕は入社したてで、受付業務をしていました。午後1時半から教習が始まるので、生徒さんに「使用するのは何号車ですよ」ということをお伝えしようとした時に、大きな地震が起きました。

当時、僕の後ろに書類の入ったキャビネットが2段に重ねてあったのですが、揺れによって上のキャビネットが30センチぐらい前にせり出してきました。キャビネットはひとつが1メートルぐらいで、重ねると僕の背丈より高くなります。その重いキャビネットがグラグラと今にも落ちてきそうになったので、「わっ」と思って、立ち尽くすみたいになりました。そばにいた女性従業員は机の下に入ったりしていたのに、それすらできませんでした。ただ唾然とするばかりで。

「こりゃ何とかせんといけん」、「こんなん重ねとったら、また同じように来たら死ぬぞ」ということで、地震後すぐにキャビネットを安全な場所に移動し、倒れないような対策をしました。



教習コースに水噴き出す

～まるで小さな噴火のよう～

(米子市 60代 男性 自動車学校職員)

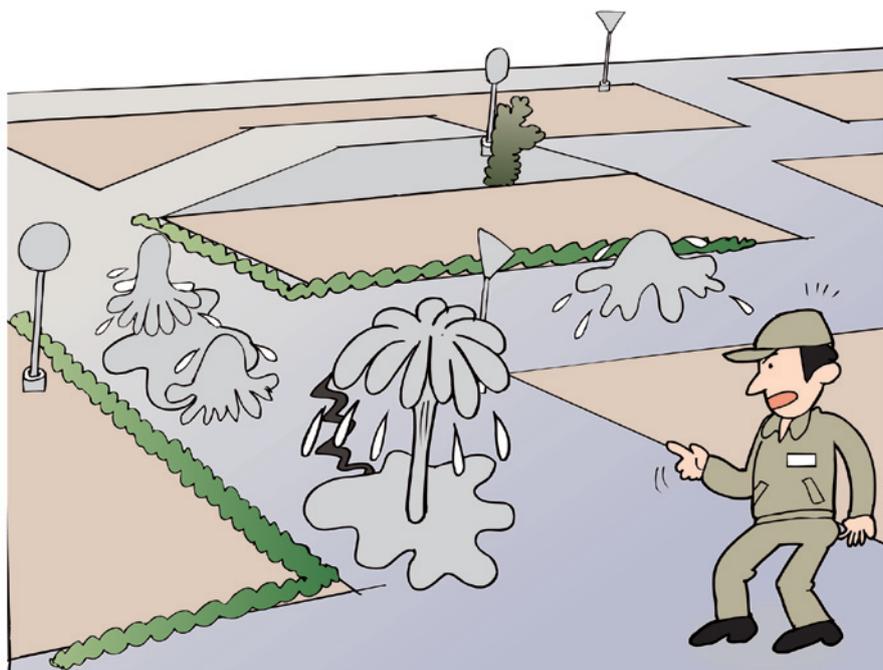
私は地震が起きたとき外にいました。瞬間、地割れでも起きるんじゃないかと思いました。本当にすごい揺れで、どこまでどうなるんだろうという感じ。あれだけ揺れたのは、今までで初めての体験でした。

以前どこかの地震のニュースで、液状化*というのを見た時に、「何で砂が水と一緒に上がってくるのか」と不思議に思っていたのですが、その「液状化」を目の前で見ることになったわけです。

教習コースのあちこちで、1メートル近く水が砂と一緒に噴き上がりました。まるで小さな噴火みたいでしたね。

ここは埋め立ててできたところだし、地下水が結構あるから、液状化になりやすかったのだらうと思います。実際に見て、「これが液状化か」って納得しました。

*液状化とは、地震の際に地下水位の高い砂地盤が、振動により液体状になる現象のこと。



車がみんなでダンスを踊っているよう

(米子市 60代 男性 自動車学校職員)

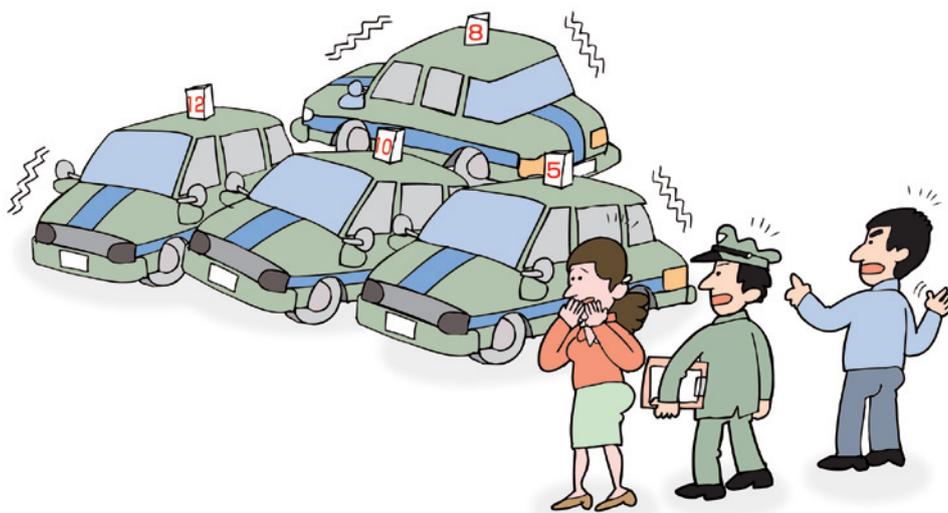
ドーンと来たのは、午後1時半から始まる教習の少し前、教習車の横に立ってお客さんに声をかけながらお迎えしている時でした。

それこそ本当に地面が波を打って、そこらへんにある車がみんなダンスを踊っているような感じで揺れていました。その光景は、10年経った今も鮮明に頭に残っています。

その後で私がどう行動したかは良く覚えていませんが、本校舎の前の教習コースに生徒さんに並んでもらって、職員が手分けして「校舎の中に残っていらっしゃる方はいませんか」と、お手洗いとかいろんなところを回って声をかけていきました。

その日の教習は一切中止ということになりましたが、途中でやめると受けたことにならない初心者講習だけは、最後までやりました。

急きょ引き返して来た送迎バスの運転手も、「川が揺れるのを初めて見た」と興奮気味に話していました。とにかくものすごい地震だったけど、校長からてきぱきと指示が出て、生徒さん全員をバスで家まで送り届けることができたことは良かったなと思います。



Yシャツ姿でつるはし、スコップ

～一気に仮復旧し、翌日営業再開～

(米子市 60代 男性 自動車学校職員)

その日のうちに早急に復旧しようということで、男性陣がまずつるはしやスコップを持って、液状化*でめくれた教習コースの表面のアスファルト*を剥がす作業を始めました。

「え、つるはしってどう使うんだ」っていう人がほとんどでしたけど、教え合ったりするヒマもないから、「とにかく掘りなさい」ということでね、みんな懸命にやりました。

幸いに学校の方に舗装用の石が残っていたので、掘ったところにその碎石を入れて、それ用の機具もありませんから、教習所にある重い大型車とかで踏み固めました。

早めにアスファルト業者に電話をして、「今日出してもらえるか」って言ったら、「出せる」と。「遅くなってもいいか」って言ったら「今日は1日かかってもやる」って言うけん、「じゃあ頼みます」っていうことでね。その日のうちにアスファルトを持ってきてもらい、舗装を終えることができました。

10月と言ったら日が短いですからね、暗くなってからは照明をつけて作業をしました。その甲斐あって、あくる日からもう営業を再開できたのです。

*液状化とは、地震の際に地下水位の高い砂地盤が、振動により液体状になる現象のこと。

*アスファルトとは、石油精製の際に残留物として得られる黒色の固体または半固体物質のこと。砂利と一緒に混ぜて道路の舗装に使われます。



道路のセンターラインまたいで運転

～地震の揺れで道路は「かまぼこ」みたい～

(米子市 20代 男性 自動車学校職員)

地震発生からしばらくして、教習所の車に乗って自宅の様子を見に行ったのですが、途中の道路はまるで「かまぼこ」みたいでした。道路の中央部分が盛り上がり、中央線の白いところがパカッと割れて、20センチぐらいのミゾが空いていたんです。

で、「どこ走ろう」って思って、他に通る車もいなかったんで、僕はずっとセンターラインをまたいで走りました。「このまま最後までいったら僕はどうやって曲がるんだろう」なんて考えているうちに道路の割れ目がなくなったので、助かりました。普通なら絶対にしてはいけないことなんですけれど。

それから学校に戻り、教習所の車で生徒さんを東山まで送ったところで、スーツ姿でアタッシュケースを持った男性の方がバツと僕の車の前に現れ、「車が無く、タクシーも来なくて、足が無い。何とか米子駅まで送ってもらえませんか」と言うのです。「いや、ちょっと僕もすぐ帰らないと」とか言いながらも、駅まで送ってあげました。よその土地から来たとのことで、「ありがとうございます!」って、言われました。



博多駅前是一片の泥の海

～通勤客は靴を片手に、水の中を歩く～

（福岡県大野城市 70代 男性 タクシー運転手）

あの日の朝6時ごろ、「雨雲が異常に黒いですね」なんて、お客さんと話をしていたのを覚えています。それから雨がだんだん激しくなっていました。

私らタクシー運転手にとっては、急に雨や雪が降ってきた時が一番の稼ぎどきですからね。「えらく降りよるな」と思いながらも、あちこちに車を走らせていました。

しばらくして博多駅の方へ行くと、あたり一面茶色の濁った水で覆い尽くされ、まるで海のようになっていました。

ちょうど通勤の時間帯だったので、タクシー乗り場にはサラリーマンや学生さんたちが長い列をつくっていました。電車もストップしてしまい、みんなそこから早く逃げ出したいと思っていたのだと思います。でも、車が列の近くを通れば、それが大きな波になってザブリと水がかかってしまいます。かえって並んでいる人たちに迷惑をかけることになるし、自分の車もこれ以上進んでは危険だと判断して、引き返しました。

中には、脱いだズボンを頭の上に載せ、靴を片手に、ハダシで道路を渡っている男性もいました。靴を濡らしたくないのは良くわかるけど、泥水はバイ菌だらけですからね、もし足でも切ったら大変だなと思いました。



アクセル踏みつづけ、必死の運転

～車はマフラーに水が入ったらおしまい～

（福岡市 50代 男性 タクシー運転手）

空港通りを行くと、博多駅前は大雨のために既に『通行止め』となっていました。「やばいな」とは思ったけれど、空港まで人を迎えに行くことになっていたのです。違うルートで行くことにしました。

車の心臓部は電気で動くコンピューターのようなものですから、水が入ったらおしまいなんですよね。万一、マフラー*から水が入ったら、車はすぐにストップしてしまいます。

だから、アクセル*ペダルを離さずに踏み続け、クラッチ*で調整をとるというやり方で、タイヤの半分ぐらいまで水に浸かった道路を運転してゆきました。ちょっとでもブレーキを踏んだら終わりですからね。もう、必死ですよ。

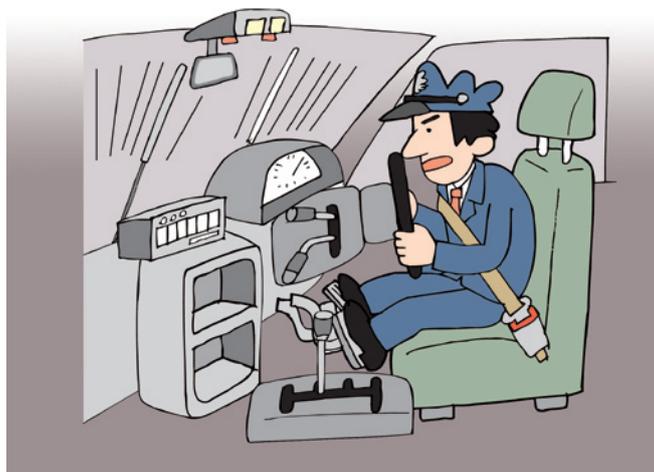
でも、これはマニュアル車(手動運転)だったからできたことで、オートマチック車(自動運転)が主流の今では、そういうやり方は通用しません。構造的にできませんからね。

だから、普段から水が溜まりやすい道路かどうかといったことを頭に入れておき、少しでも危険を感じたら、引き返す勇気も必要だと思います。

*アクセルとは、自動車の、足で踏んで速度を調節する装置(加速機)のこと。

*マフラーとは、オートバイ・自動車などの消音装置のこと。

*クラッチとは、エンジンの回転する力をタイヤへ伝えるのか、伝えないのかを選択する装置のこと。



危険を知らせる人たちを、『お客さん』と勘違い

～水溜まりに突っ込みエンジンストップ～

（福岡県太宰府市 50代 男性 タクシー運転手）

水害が起きた日は「何かいつもと違う。おかしいな」とはうすうす思っていました
が、雨の日はお客さんも多いし、張り切って仕事をしていました。

すると、前方に、女の人が二人、こちらの方に向かって手を振っているのが見え
ました。私はてっきりお客さんが呼んでいるものと思い、迷わず車を直進させまし
た。

ところが、そこは土地が急に低くなっている箇所、プールのように水が溜まっ
ていたのです。私の車はあっという間に深みに突っ込み、エンジンが止まっていま
いました。

後からわかったのですが、女性たちは両手で×印をつくって、道路の危険を知ら
せようとしてくれていたのです。

その女性たちに車を押しもらって、何とかそこから脱出することができました
が、車はテコでも動きませんでした。

仕方がないので営業所に電話で事情を説明し、レッカー車で迎えにきてもらいま
したが、エンジンが止まると車はハンドルもブレーキもきかなくなりますから、曲
がり角の多い町の中を引っ張ってもらうのは、それは大変でした。

雨水が溜まるのはアンダーパス*だけじゃないってこと、この失敗で思い知りま
した。

*アンダーパスとは、交差する鉄道や道路などの下を通過するため、周辺の
地面よりも低くなっている道路のこと。



大雨の中の運転はプロでも命がけ

～経験と判断で身を守る～

（福岡県大野城市 70代 男性 タクシー運転手）

大雨が降っている時の運転は、プロの私たちでさえ命がけです。特に夜の運転は、ヘッドライトの光が雨に当たってはね返されてしまうので、先が全然見えなくなってしまう。そういう時は前に行く車のテールライトを頼るほかありません。

それに、ワイパーで処理しきれないほどの激しい雨になると、一瞬、前が見えなくなってしまう。そんな時、驚いて急にブレーキを踏んでしまいがちですが、あとからくる車が追突したりしてとても危険です。フロントガラスに水をはじく撥水処理はっすいをしておく、雨がストンと下に落ちて見えやすくなるので、できればそうしておくといいですね。

以前、高速バスが自分の車の横を通った途端にもものすごい水しぶきがかかり、一瞬前が見えなくなって怖い思いをした経験もあります。

だから、「雨が降っている時はスピードを出さない」、「道路に水が溜まってきたら、自分の目でセンターラインの白い線が確認できなければ前には進まない」、ということを経験して運転するようにしています。



避難場所ってどこだっけ？

（清須市 60代 女性）

あの日、夜のニュース番組のあいだ中、大雨で警戒が必要な地域の名前がテロップで流れていました。その中にうちの地域の名前もありましたが、庄内川上流域の地名が多かったので、勝手に「決壊をするなら庄内川だろう」と思い込んでいました。

気になって外を見には行きました。でも、雨がザーッと降って、そのあと側溝に引いていっちゃう。道路もザーッとあふれるくらいで玄関の元まで来ては引いていくっていう繰り返しだったんで、万が一のためにカンパンとかを少し袋に入れてはしましたが、あとはそのニュースを見ていたんです。

12時半ぐらいに組長さんが玄関の戸をドンドンって叩いて、「避難勧告が出てます。指定避難所へ逃げてください」と、1軒、1軒町内を回ってきたんです。それで主人と「どうしよう」と話し合いましたが、「指定避難所ってどこだろう」って、冷静に考えるとわからないんです。その頃はそんなもんでした。



ホームセンターの屋上に避難

（清須市 60代 女性）

うちは車椅子の子がいるもので、避難勧告が出たことを聞いても、家の前の道路の水もそんなに増えていないし、避難場所の町役場のホールは2階だから車椅子じゃ階段のぼれんだろうし、人もいっぱいおるようだし、「もう行けれんなあ」ということで、「もうちょっと様子を見よう」ってなっちゃったんです。

それでそのまま、寝込んでしまいました。で、夜中の2時ごろ、気がついたら、もう1階の寝室の畳まで水がヒタヒタときていたのです。

「これはもういかん。とにかく障害のあるこの子を連れてかないかん」と、家の真横に止めておいた車に乗りました。道路の水はまだ車輪の上くらいでした。

「とにかくエンジンかけて逃げよう」、「どっちへ逃げよう」ってなった時に、2軒隣のおじさんが「こうなったら、上へ逃げろ!」って言ってね。近所の人たちと家の真ん前のホームセンター（2階建て）の屋上にある駐車場へ上がりました。

それから道路の水が徐々に増えていきました。私は駐車場の台の上に立ち、自分の家の軒まで水が上がっていくのを茫然と見ていました。



前の晩「おかしいね」と言いながらいつものように就寝

（清須市 60代 女性）

あの日の朝、新聞を取りに行った主人に、「玄関まで水が来ているぞ」と言われ、飛び起きました。私たち夫婦が1階で、80代のおばあさんと息子が2階で寝ていました。

水はみるみるうちに増えてきました。

バタバタしているのに気づいた息子が下りてきたので、「早く荷物を上に運んで!」と言って、布団とか着替えとか、目の前のものをほとんど2階に上げました。仏壇は気がつくのが遅れて、水に浸っちゃいましたけれどね。

前の晩、雨の音にまじって何か聞こえた気がして戸を開けると、北の方に市の広報車みたいなのが見えました。うちの周りは排水が悪く、もうその時点で道路に水がたまっていたせいかこっちまでは来なくて、「あ、やっぱりなんか回っているよ」って感じでした。

ニュースでも言っていたし、雨がすごくて、「おかしいね、なんかすごいね」って話をしていたのに、堤防が切れるなんて想像もしていなかったので、いつものように寝てしまったんです。



おばあさんが備えておいた缶詰で助かる

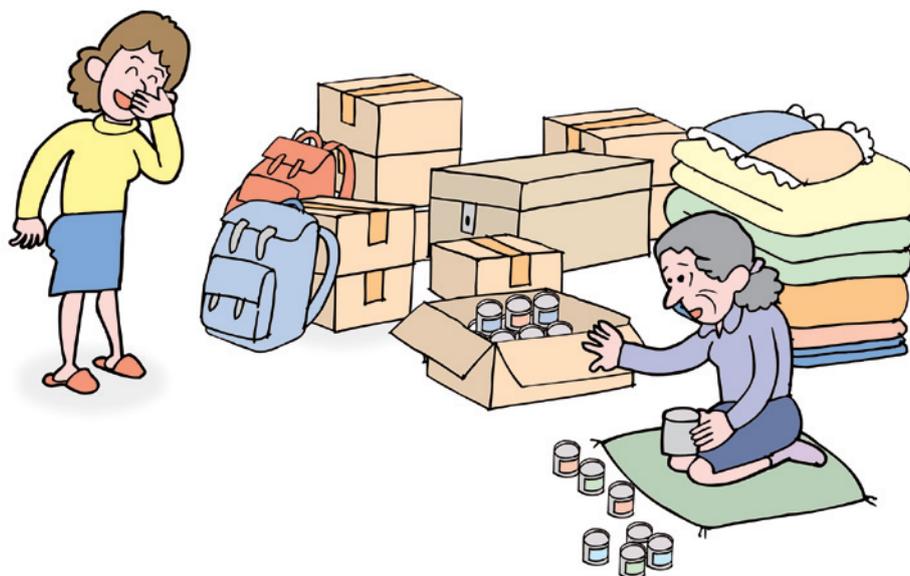
（清須市 60代 女性）

うちの玄関は道路から1メートルぐらいの高さにあるんですけど、気がついたらもう玄関の入口まで水が来ていました。で、「外に行くのは、やめた方がいい」ということになり、2階に避難しました。

年寄りには準備がいいんですね。2階のおばあさんの部屋には缶詰などの保存食がいっぱいありました。それに、避難する際に米ビツから水に浸かっていない上の方のお米だけをかき出して運んでおいたので、「今、まだ大丈夫だから」って、すぐにガスでご飯を炊いて、おにぎりをたくさん作りました。

前の日に買ってあった揚げ物とかもあって、食べ物には苦労しませんでした。ご近所の皆さんに悪いなと思ったぐらいです。

やっぱり万一の時に備えて食料を確保しておくことは、必要なんですね。



地震対策の突っ張り棒が水害でも生きた

（清須市 60代 女性）

水害の後片づけは大変で、年末近くまでかかりました。

私は水を含んだ畳が重たくなるのはイメージできていたものですから、「出しやすいところまで、畳出しといた方がいいよ」と言って、息子と主人に半分ぐらい下ろしてもらっていたので、少しは良かったかなと思います。

それとタンス。あんなふうになるとは思わなかったけど、木が膨張しちゃって引き出しが抜けないんですよ。しかたがないからタンスを倒して後ろに張ってある板を外してそこから濡れたものを取り出していきました。一張羅の着物も「うわぁ〜」と言いながら放り出してね。

浮力ってすごくて、重いものでもみんな浮いちゃうんです。冷蔵庫も浮いてから倒れました。でも、突っ張り棒で止めてあった食器棚は倒れなかったで、中の食器を出して洗うだけでした。地震対策が水害にも役に立ちました。



2階に避難して正解

～分かっていたならもっと準備をしていたのに～

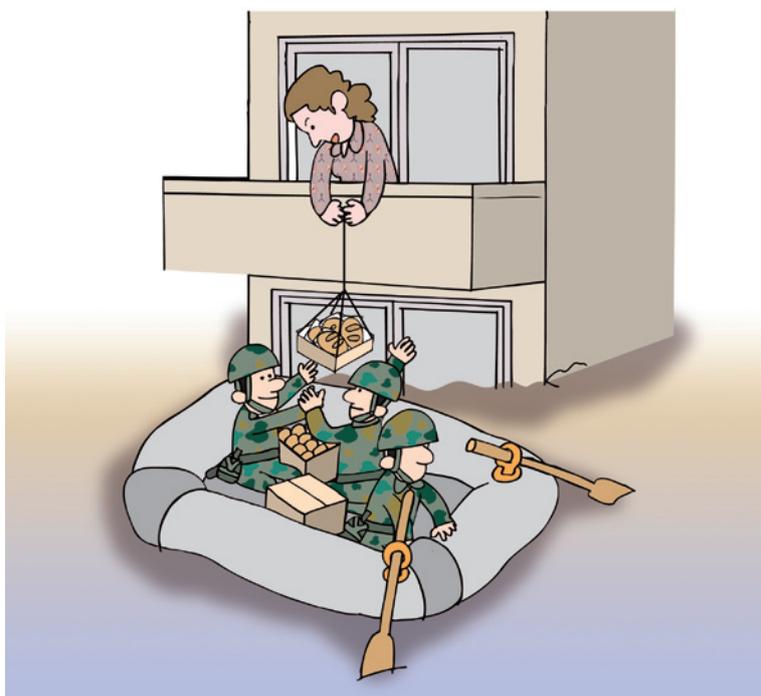
（清須市 60代 女性）

水は低い方に流れるって本当ですね。川が決壊すると、周りより土地が低い私たちの町へ水が一気に流れ込んできました。けれど、2階までは水が来なかったので、2階で待機していたのは、結果的にバタバタしなかった分だけ良かったかなと思います。あの状況でどこかに避難するっていうのはかえって危険でした。

でも、水が2階への階段を一段ずつのぼるように迫ってくるのは、どこまで水が来るかわからず、「増えてる、まだ増えてる」と、すごく怖い思いをしました。

丸2日間、自衛隊がボートで運んできた菓子パンや家にあったものを食べて、何とかしのぐことができました。自衛隊のパンは、たまたま2階にあったビニールひもを窓から投げ下ろして、結びつけてもらって引き上げました。

こうなることが分かっていたら、多分もっと準備をしていたと思いますが、60年位ここに住んでいる主人が、「伊勢湾台風の時だって、道路にチョコっと水がきたぐらい」と言っていたので、「まさか」って思っていました。



水害はドロの災害

～後始末に四苦八苦～

（清須市 60代 女性）

水害ってというのは水だけが来ると思っていたのだけれど、泥が来るんですよ。これは予想外でした。まさにドロドロですね。

水が引いたあとには、家の障子の棧にびっしり泥がついていて、拭いてもあとからあとから茶色い水が浮き出てくるんです。木の目の中まで泥水がしみ込んでいるから、乾くとまた泥が噴いてきて、拭くとぞうきんが茶色になりました。

水が引いて、皆さん家の前へ家財道具を出したでしょ。道路って道路の両側がゴミの山で、車が1台やっと通れるぐらいになっていました。当時、電化製品は水にぬれるとダメになると思い込んでいたので、水で洗えば使えるものまで捨てていました。生活の臭いがする道具がゴミとなり、山と積まれている光景を見るのはしのびなかったです。

乾いたら乾いたで、今度はほこりと粉塵。風が吹くと砂ぼこりがブワッと立って、マスクをしないと咳き込んだり、気持ちが悪くなったりするほどでした。水害って本当に後が大変なんです。



大事な楽器は実家の2階に避難

～気づいた時にはマンション水没～

（名古屋市 50代 男性 音楽家）

夜の11時頃、雨も小降りになり、道路の水も引き始めたのですが、ちょっと不安を感じて車で庄内川を見に行くと、江戸時代から水を貯めるための大きな場所があるのですが、その敷地内にある自動車学校の自動車が流れて橋の欄干に当たる音が聞こえたぐらい、とんでもない状況になっていました。

で、僕は、実家の1階を事務所にして楽器や機材とかを置いていたので、1時間ぐらいかけてそれらを2階に運び、疲れ果て、照明器具と一部の機材をそのままに、12時過ぎに少し離れた自宅のマンションに帰りました。

翌朝5時頃、実家の母から、「玄関から水が押し寄せてきた」という電話がありました。

「トイレからも水が噴き出している」と言うのです。急いでカーテンを開けて窓の下を見ると、辺りは1メートルぐらいの茶色の濁流で覆われていました。

同じマンションの人たちも各階の廊下に出て、「大変なことになったね」と言いながら、どこからきた水かも分からないまま、ただ静かに見守るほかありませんでした。



食べ物もらいに 胸まである泥水の中を歩く若者

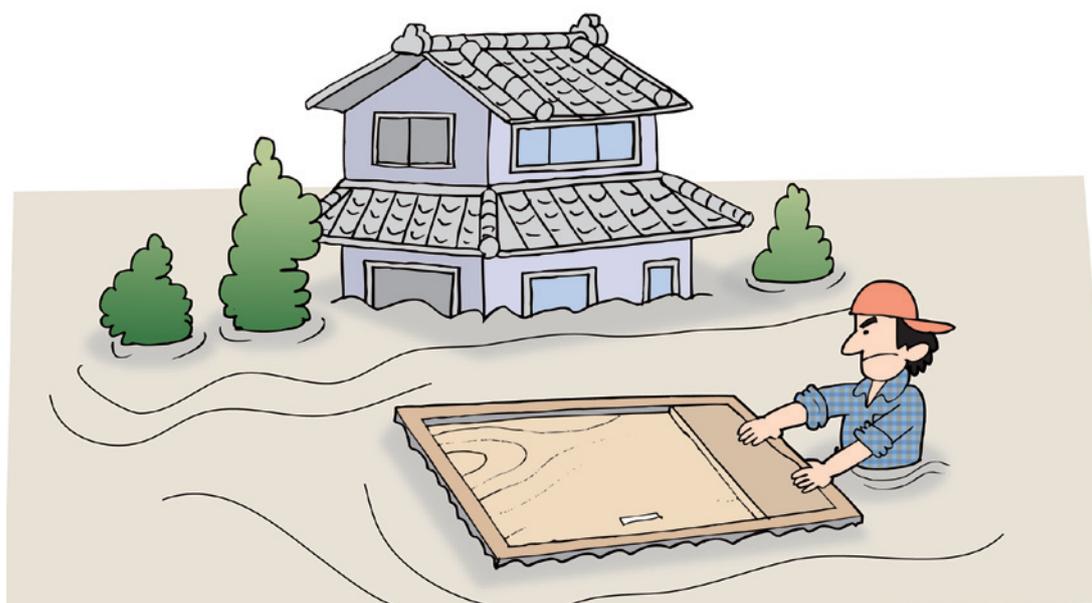
（清須市 60代 女性）

夜中の2時ごろ、気がつくとも床上まで水が来ていたので、着の身着のまま、近くのホームセンターの屋上に避難しました。近所の5世帯ぐらいが一緒でした。

次の日の午後になると上空を自衛隊のヘリコプターが飛び回るようになり、警察署の辺りに荷物を降ろしているのが見えました。「あれは絶対食べ物だ」と言って、みんなで「こっち、こっち」と手を振ったのですが、ヘリコプターは来てくれませんでした。食べる物もなく、みんな腹ペコでした。

自衛隊のボートが見えたので、「助けて!ここにおるよ!」って、上から叫んだけれど、「まだ残っている人を探して歩かな。あんたらは後だ」と言われました。

すると、180センチくらいの体の大きな青年が、「救援物資が下ろされた辺りまで行って来る」と言って、胸まで冠水した道路を戸板のようなものにつかまりながら歩き始めたのです。結局、その若者は、もらった水を板の上に乗せて戻ってきました。無事だったから良かったけれど、側溝などの深みにはまって命を落とす危険だってありましたからね。行かせるべきではなかったと、今はそう思います。



女性が一番困ったのはトイレ

（清須市 60代 女性）

隣近所5世帯ぐらいが近くのホームセンターの屋上に避難していました。避難所に行く時間の余裕がなかったのです。小さい子どもがおったり、妊婦さんがおったり、重度の障害児がおったり、それぞれに家庭の事情がありました。

屋上にある駐車場ですから屋根もなく、もちろんトイレ也没有せん。雨がジャアジャア降り、コンクリートに叩きつけられては水しぶきとなっていました。

食べる物がなかったのも辛かったけれど、何と言っても一番困ったのは、トイレでした。

男性はあっちこっち、雨の中で用を足していたけれど、女性はそんなわけにはいかんもので、うちの娘も「いい、いかない」って。体に良くないと言っても、夜中の2時から翌日の夕方の4時ごろまでずっと我慢をしていました。

ようやく自衛隊のボートが回ってきて乗り込む順番を決める際に、みんなが「あなたのところが一番でいい」って言うてくれて、嬉しかったです。



水没した車に当たりながら進んだ救援ボート

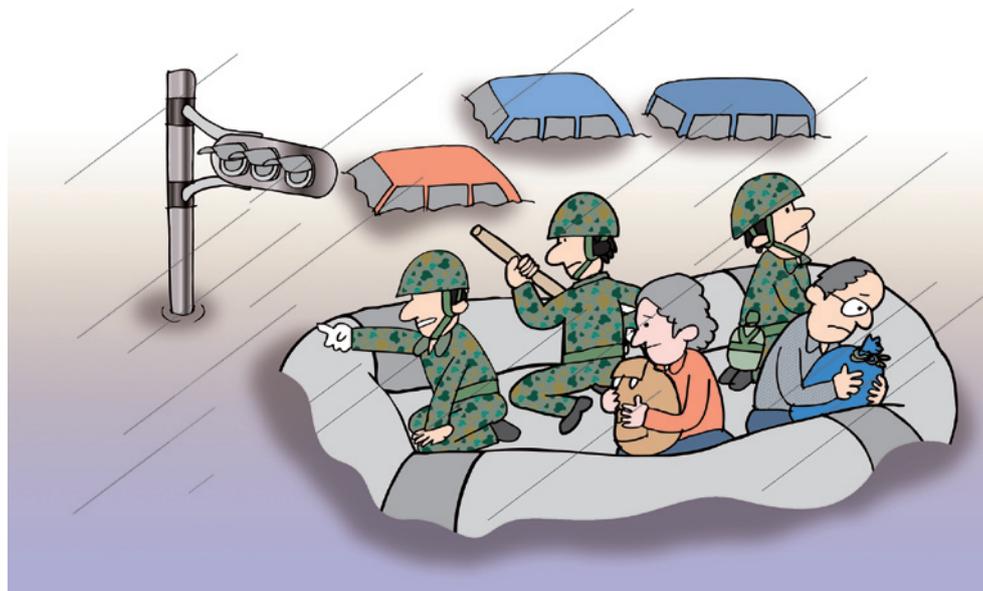
（清須市 60代 女性）

交差点のところに自衛隊の大きなバスとかトラックが待機していて、私たちはそこまで救援ボートに乗せていてもらいました。

今でも忘れんけど、ガチャガチャとボートが何かにぶつかるんです。「あ、ここに車がある」と自衛隊の人が言ってね。

姿は見えないのだけれど、泥水の下に自動車は何台も沈んでいるということで、アンテナみたいなのがチラチラと見えていました。それに、車の警笛みたいな音が、どこかでピーピーと鳴り続けていたりして、誰かが「車が泣いている」って言っていましたが、本当に不思議な気がしました。

こんなにすごい状況だったのに、車で庄内川をわたったら、「まいどおなじみの……」って、ちり紙交換の車が通っていました。対岸で何が起きているかなんて関係ない。その差にすごいショックを受けました。



1軒、1軒叩き起こして「避難してください」

（名古屋市 60代 男性 消防団員）

私は消防団員であり、民生委員でもあるので、水害時には消防活動が先か、1人暮らしのお年寄りのケアが先かと悩んでしまいます。

あの日、出勤準備をして待機しているところへ団長から詰所の方へ来るようにという連絡がありました。集まってすぐに仲間4人で消防団の消防車に乗り、受け持ちの地域を「避難してください」ってマイクで流してまわりました。

特に川の近くの心配な地域では、1軒、1軒、たたき起こして、「避難勧告が出ているので、小学校の方へとにかく早めに避難してくださいよ」って言ってね。起きてこないところはいつまでも戸を叩いているわけにもいかないもので、起きたところだけ伝えました。

その頃はまだ水が増えたり、引いたりしていて、道路の水は消防車のタイヤの半分ぐらい。まだ十分避難できる状態だったので、「年寄りの人は早く避難してくれればいいな」と思っていました。でも、まさか堤防が切れるとは誰も思っていなかったんです。



小学校へ避難途中に福祉施設へ緊急避難

（名古屋市 80代 男性）

夜中の1時半ごろ、パトカーが「避難してください」って、サイレン鳴らしながら来て、飛び起きました。

いつも自分の住む地域が低く堤防が切れたら水没するなと思っていたものだから、「とにかく2階以上の場所へ避難せにゃいかな」と。避難場所は小学校になっているんですけど、一緒に生活していた障害者の息子を車椅子に乗せて、自分も経営に携わっていた近くの福祉施設に行きました。その時はまだ施設内に水は入っていませんでした。

灯りをつけ、ドアに鍵をかけずにいたら、南へ避難する大勢の人たちが、水がどンドン下から上がってくるので、たまらず施設の中に避難してきました。50人位いたと思います。

施設は、1メートルはいかなかったけれど水に浸かりました。避難された方たちが施設内のものを全部テーブルに乗せるのを手伝ってくれました。

とにかく水の勢いがすごく、ドラム缶なんかも流れてきたほどでしたから、通りがかりの人たちが緊急的に施設に避難されたのは賢明だったと思います。



災害時の助け合いは普段のつき合いがあつてこそ

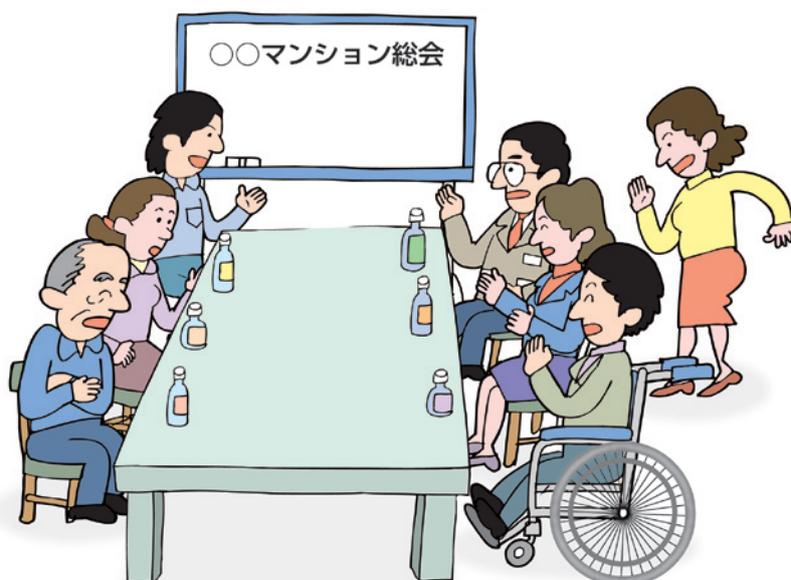
（名古屋市 50代 男性 音楽家）

私の住んでいる分譲マンションでは、1階が床上40センチぐらいまで浸水しました。明け方に水が来た時は、1階の人と一緒に2階のベランダ越しに外を見ていたんです。

水が入ったために停電になり、エレベーターが止まってしまったので、9階に住んでいるひとり暮らしの障害をおもちの方は、移動手段がなくなって、大変苦労されていました。で、そのお向かいやお隣の方が食料の調達とか、いろいろ面倒をみていました。

その障害のある方はマンションの年1回の総会にも必ず出てくるんですよ。だから、彼が車椅子で入ってこられるよう会議室の出口を広げたりしていて、ほとんどの住民が「がんばっている人だな」という認識がありました。

やっぱり、ふだんから近所つき合いができていたから、自然に手助けができたのだと思いますよ。連絡は取れない、総会にも来ないという人には手助けのしようがないですからね。



地域で緊急避難場所の提供を考えよう

（名古屋市 80代 男性）

避難場所に学校とか公共施設だけを指定するのでは、とても収容能力が足りないと思いますね。

あの時、緊急的に近くの施設に避難した人たちがいましたが、水害の場合には、隣でもいいし、何階でもいいから、地域で共存して助け合って生きるという考え方から、民間にも避難場所の提供をあらかじめお願いしておくことも必要ではないかなと思っています。

断る人もあるだろうけど、3軒に1軒は協力してくださる方もいらっしゃるからね。そういうことを行政や自治会が積極的に声掛けしてやったらどうかと。

車椅子の人は、腰まで水が来たら、移動はできません。

近くの川の堤防が決壊して5メートルの濁流が来たら、遠くの避難所へは逃げようがないわけで、そういう時はやっぱり隣の2階、3階の家へ緊急避難っていうこともやらないといけないと思います。



必死で喫茶店のゴミ出し、清掃

～水害後13日ぐらいで店再開～

（名古屋市 60代 男性 喫茶店経営）

3日目ぐらいに消防団の仕事が一段落したところで、店に戻りました。店内にはまだ椅子の高さぐらい水がありました。

完全に水が引いていないので、満ち潮になると、さっき外に出したゴミがまたこっちに流れてくるんですよ。潮の満ち引きのたびに行ったり来たり。それを2、3回やっとするうちに、ダーっと一気に水が引きました。

クーラーの室外機は流れてきた車と一緒に押し流されて壊れちゃったし、冷蔵庫も使いものにならなくなって、店内にあるものすべてがゴミとなってしまったのです。

残ったヘッドロが30センチぐらいあって、シャベルなんかではどうにもならず、機械で上げてもらいました。

とにかく店中を水で洗って、何とか乾いてっていう感じ。復旧工事の人たちに休憩場所を提供したくて、がんばって12日か13日目ぐらいにはお店を再開させました。



これは危ないぞと思えば・・・

～ 4年前の水害経験踏まえ～

（福岡市 60代 男性 消防団員）

当時わたしは分団の所属でした。前の晩からものすごい雨だったので、床に入っても眠れず、「このままじゃ絶対に何か起きるはずだ」ということで、まだ夜が明けてない午前3時半ごろに河川を見に行きました。

すると、もうみるみる水位が上がってくるという状況。「これは尋常じゃない」と思い、警報が出る前に、分団の人間を集めました。

消防の本部は本部で、体制を整えていたと思うんですけど、自然災害に対しては分団単位で自主的に活動するということがありますので、これは危ないぞと思えば、地域の防災にあたるということだね。

4年前にも大規模な水害がありましたからね。「これくらい降ったら、水が出る」ということはみんなもわかってた。だから、早めの対応ができたんだと思います。



網の目フェンスにゴミが詰まって水はけず

～まるでビーバーのダムみたい～

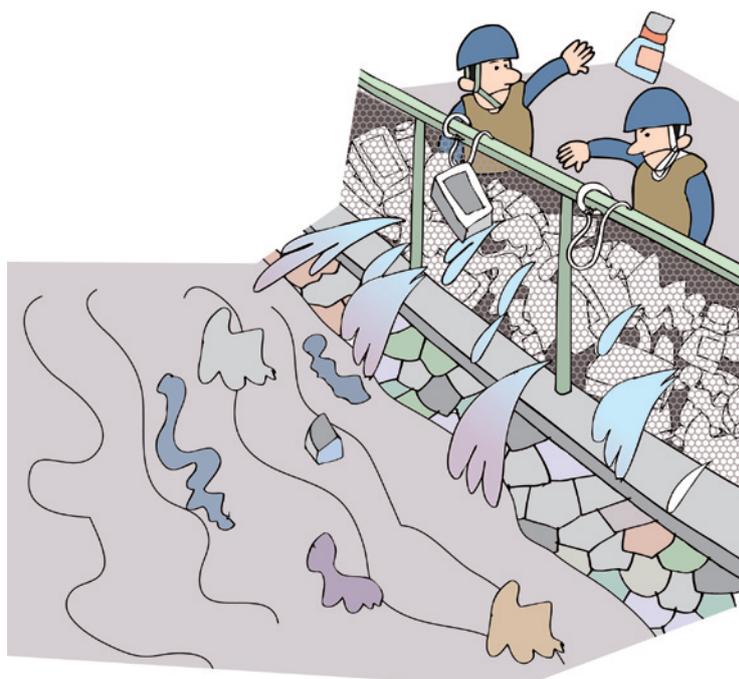
（福岡市 60代 男性 消防団員）

御笠川の上流で1時間100ミリの豪雨を記録したということだね。その川が源流から河口まで非常に短いことは承知していたし、上流で大雨が降れば即洪水になるっていう理屈は聞いたけど、体験したのは初めて。早朝の4時過ぎに川が溢れ出してからは、もう一気に、手のつけどころが無いというか、土のうなんかは全く役に立たないという状況でした。

川の堤防が決壊した地域では、約500戸の住宅に土砂が入り、消防団が現場に駆けつけた時には乗用車が何十台も天井が少し見えるか見えないかぐらいに水没していて、車の中に人が入っているかどうかは、高い橋の上から見て確認しました。

その際こまったのは、人が落ちないように水路に沿って張られていた網状のフェンスに、流れてきた発泡スチロールやゴミなどがひっかかり、ビーバーがダムを作ったみたいになってしまったことです。水が全然はけず、フェンスの高さ1メートルぐらいまで水が溜まってしまい、消防団員が命綱をつけてゴミを取り除きました。

で、災害後に区役所と協議して、ゴミが詰まらないようフェンスの網の目部分を柵状のものに替えてもらいました。こういうことって、実際に体験してみても初めてわかることなんですよ。



流れの速い川には近寄るべからず

～消防団員の経験から言っておきたいこと～

（福岡市 70代 男性 消防団員）

消防団に入ってもう55年になりますが、最近の雨の降り方の異常さは感じています。台風が付随した豪雨は過去にもたくさんあったけれど、近ごろは完全に雨だけやもんね。

雨粒の大きさが違うような気がするし、トタン屋根とかじゃない家の中にも雨音で恐怖を感じることもあります。そんなことって、今まではそうそうなかった。

それから、長年の経験から言えることは、「流れの速い川のそばには、絶対に近寄っちゃいかん」ということですね。よく老人が田んぼや畑を見回りに行って、小さな水路に落ちて流されたって話を聞きますが、普通は「なんで、そんなところで」って思いますよね。

でも、それはちっとも不思議なことではなくて、水の流れを見ているうちにめまいを起こすんじゃないかと思うんです。自分たちでさえ、増水した川をじっと見ていると、思わず体が引きずり込まれるみたいになりますからね。



消火栓でヘドロを洗い流す

～二次災害防止で分団と地域が決断～

（福岡市 60代 男性 消防団員）

水害の後は、道路が乾く前にヘドロを完全に洗い流さないと、あとで車が通るたびに粒の細かい粉末のような砂ぼこりが舞ってスモッグ状態になり、歩くことさえできなくなります。

ヘドロを普通の水道で洗おうとしても勢いが足りません。消防のホースを消火栓につないで一斉にダーっと洗ってしまえば早いんです。でも、水道水を使うことになるから経費が高くなるし、消火栓を火災の消火活動以外に使っちゃいけないという法律もあるから、最終的には市長の判断が必要になります。

ただ、大規模災害のときは、消防団の分団長または副分団長の判断で活動できる部分もありますから、私たちは地域の自治会長さんと相談して、「お金ですむことならば」ということでやりました。

そうしなかった地域から、「何とかしてくれ」という苦情が市の方にたくさん寄せられたそうですが、これからはこういう事もあらかじめ検討しておく必要があると思いますよ。水害の場合は、とにかく汚れが乾く前に洗い流すこと。後片付けも、初動活動が大事なんです。



水が出てからじゃ、逃げようと思っても逃げられない

～地域で声かけ、早めの避難が大事～

（福岡市 70代 男性 消防団員）

うちのグループで1階部分が水に浸かったところは、1戸1戸確認して回りました。それが100戸以上。ある住宅では、車椅子の女性が膝ぐらいまで浸かっていたので、抱え出して小学校の方に避難してもらいました。地元の人が「あそこは1人やから。車椅子じゃから」って言うから、家の中まで入っていきました。

ただ、一般の人は、実際に自分のところへんに水の来んかぎり避難所に行かんとです。「学校か公民館に避難してください」と言っても、「いや、うちは来んでしょ」ってというような感じでね。川のすぐ近くの人たちは避難するけど、もう1つこっちの道路になると溢れてなければ全然腰をあげません。「川の近くじゃけん、見える」とおっしゃった人もおるけど、そこらへんが難しいなと。

川が溢れる時は、見る間にドーって増えるけんね。水が出てからじゃ、逃げようと思っても逃げられんようになるってことを知っててもらいたいなと思いますね。



地域に頼られる消防団

～これからは若い人の力にも期待～

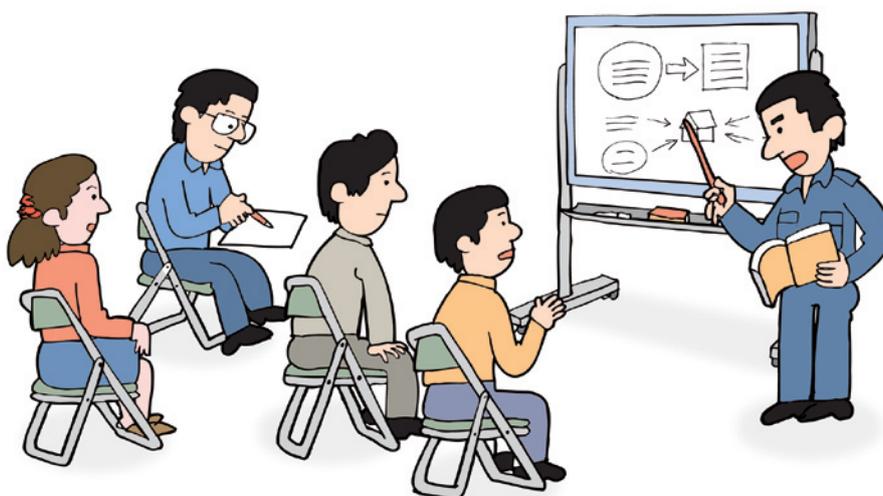
（福岡市 60代 男性 消防団員）

去年だったか、市の広報車が街の中をスピーカーで避難するように流して回りましたが、避難できない人が多い。「自分たちだけではどうにもならんから、消防団、加勢してくれ」ということですね。

だから、地域に密着しとる消防団の価値っていうのはそこにもあると思うんです。「あそこはお年寄りやから」とか、「足が悪いから」というのを知っていますからね。民生委員さんがそういう情報を持っていても、かなり年長の方が多いけん。

自治会長さんや自主防災の責任者にしても、自分ところにも水が来そうな時に、避難していない人のところに行って確かめるっていうのはなかなかできませんよ。普通の人やけん。

自分のことを放ったらかしても出らないかんというのが消防団。全国的にみれば福岡市は消防団に入る人の率は高い方だと思いますが、まだまだ足りません。最近では、直接大学に行って講義をするなど、学生さんたちと接点を持って消防団への理解を深めてもらう活動に取り組んでいます。やってみると、若い人は意外と防災意識が高いんですよ。



土のう積みは消防団が災害出動。片づけは住民の手で

～役割分担を理解して～

（福岡市 70代 男性 消防団員）

水害の危険がある時に、私たちが土のうを築いていると、「うちの裏の方にも」って言われます。水害の場合は範囲が広すぎるから、なかなか手がまわりません。「待ってください。ここを積み終わらないと動けません」と言うと、「いや、何人かでもいいから」って。でも、やはり10人単位で行かないと、土のう積みなんかもさばけないんですよ。で、「何で早くやってくれなかった」って、後で文句を言われます。

逆に、水が引くと、「邪魔になるから、土のうを早く片づけてくれ」と言ってくる。きれいだったら自分のところに置いとって、汚れていたら中の砂は何かを利用して、袋だけゴミに出してくれればいいんです。

私たちも「土のう積みは災害出動でしますが、片づけは自分たちでするんですよ」ということを、住民の皆さんへ意識づけをせないかんと考えていますが、自主防災の役員の人たちもこういうことを理解して、次の人にちゃんと引き継いでくれたらいいなと思いますね。



100メートル以内、すぐに行ける避難場所が欲しい

～近くのアパートやビルを事前に指定～

（福岡市 60代 男性 消防団員）

避難場所が指定されとって、大水の場合は、その場所に避難する途中で危険箇所がたくさんあるというのが問題ですね。

早い段階で避難場所に行ってもらえればこちらもだいぶ助かるんだけど、実際には水が出てからあわててという人が多い。だから、500メートルも600メートルも歩いて避難するんじゃなくて、100メートル範囲内で避難できるようなアパートとかビルなどを避難場所として自治体が要請するというような、きめ細やかな避難場所の設置がこれからは必要だと思いますね。

何も知らないところにいきなり避難してって言われても困っちゃうけど、前々からそういうことが決まっていれば問題ないと思います。水害はいつの間ですからね。水が引いてきれいに洗い流したら、「ここんところまで水が来たと？」っていう感じ。

だから、ほんの数時間、安全な場所に避難することが重要なんだと思います。



止水板の設置で地下浸水を未然に防止

～浸水すれば大被害、排水も困難に～

（福岡市 60代 男性 消防団員）

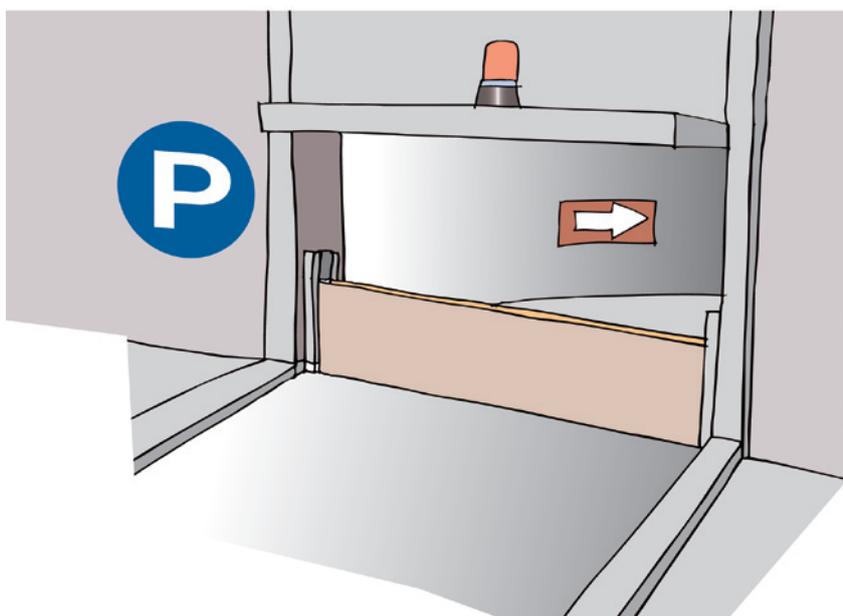
当時、「とにかく地下に入った水をくみ出してくれ」というビルの所有者からの要請がたくさんありました。消防の小さなポンプでやったら、何十時間かかるかわからんような状況でしたから、「誰か人がおるんですか」と聞いて、「いや、人はいない」となれば、「今はその段階ではないので、後で」と言いました。消防のポンプは1台しかないんですよ。

大概、ホテルでも企業でも、じゃまにならんよう地下に機械やら自家発電機やらを置いています。それらが水に浸かったために、電気系統がほとんどやられてしまったのです。

地下に溜まった水をくみ出すのは大変な作業です。排水溝のフタにゴミがひっかかるとヘドロのようなものがたまり、それが乾くとセメントを固めたような感じになってしまうから手に負えません。

水は低きに流れるといいですが、すごい勢いで入りますからね。みるみる地下が水で埋まってしまいました。それがあって、今では駅の近辺のビルには全部止水板*が付けられています。

* 止水板とは、建物や構内への水の浸入を防ぐ板のこと。



止水板でどうにか被害食い止める

～ 4年前の水害の経験生かし早めに準備～

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

博多駅近くのホテルでは、平成11年の水害で駐車場に水が入って電気設備がだめになり、何日間も営業停止に追い込まれました。その苦い経験を踏まえて、止水板*を備えていました。

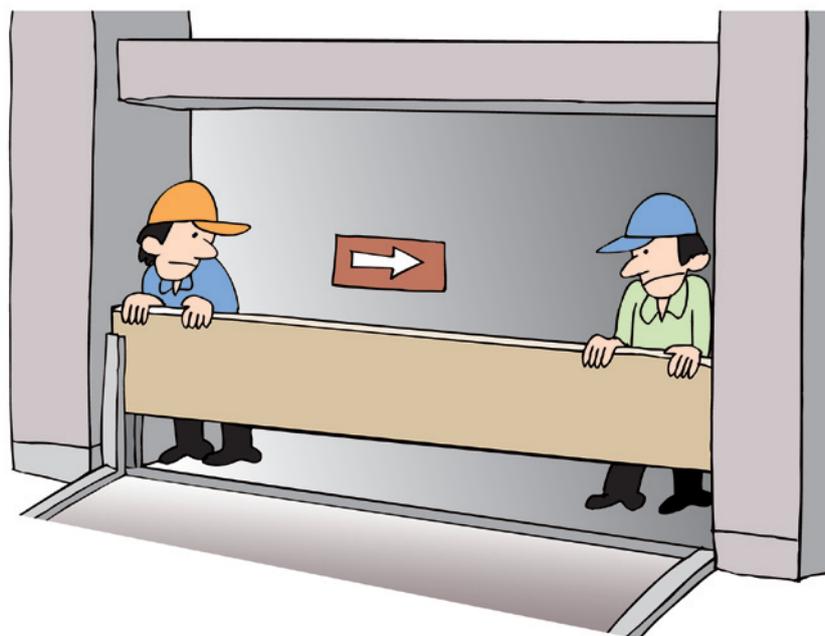
あの日も朝早くから関係者が河川の情報を入力して、浸水する可能性があるという判断で、事前に止水板を設置していたそうです。

当時は川があふれたんじゃなくて、堤防が決壊したんですよね。だから、まさに想定を超える水の量だったわけです。

水はその60センチの止水板を超えてやってきたけれど、止水板を立てておいたおかげで、なんとか大きな被害にはならなかったとのことでした。

事前にできることは全てやっておく、そういう姿勢が大切なんだと思います。

* 止水板とは、建物や構内の出入口に設置して、水の浸入を防ぐ板のこと。



地下浸水防止は地域ぐるみで

～駅周辺のビルと連携、訓練も～

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

博多駅は、地下道でつながっている『接続ビル』が多い駅なんです。地下鉄の入口は止水板*とかで水の浸入を防ぐことはできるけど、隣接したビルの一カ所でも水が入ったら、地下鉄はどうしようもありません。当時は隣のビルの駐車場に入った水がドッと押しよせてきました。

で、「地下鉄が一番低いんだから、そっちへ水やっつけ」という考え方じゃなくて、「何かあった時にはお互いに連絡をとりながら対応しましょう」ということで、周りのビルとのネットワークを作りました。地下街はもともと防火に対する意識が高く、防火管理協議会という組織ができあがっていましたから、それに水害対応を加えたかっこうです。

「洪水になりそうだよ。うちは止水板をするから」という情報を流したら、皆さんが「そういうことなら、うちも止水板をたてよう」というような、情報交換のシステム作りを進めていますし、緊急事態になると人はどうしても慌ててしまいますから、こういう場合はどこに何を連絡するかといった訓練も合同でやっています。

1ヶ月に1回の訓練でも、やれば少しずつ身に付いていくものだと思っています。どこの都市でも地下空間がどんどん広がっていますから、連携して水の浸入を防ぐことがますます大事になると思いますね。

*止水板とは、建物や構内の出入口に設置して、水の浸入を防ぐ板のこと。



駐車場にたまった水が店を突き抜け地下鉄の駅へ

～水の力ってものすごい～

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

地下鉄の駅に降りていく階段の踊り場に商業施設の出入り口がありました。当時その店が改修工事をやっていたため、その出入口はパネルでふさがれていました。

ところが、その店の反対側は地上に通じる駐車場に面していたんです。地上から流れ込んだ水で駐車場が満杯になると、行き場を失った水が改装中の店の中にどっと押し寄せたのです。

消防隊が駆けつけた時には、踊り場の出入口をふさいだパネルは今にも破れそうな状況でした。どこかで「破壊するぞ」って声が出て、誰かが「危ないから逃げれ～」って言ったとたん、バーンとパネルが破裂して、地下鉄の駅の方にドーンと水が流れ込んできました。

駐車場がプールのような時点で、私たちも駐車場の職員と一緒に工事に使う鉄板や鉄柱を置いて水を止めようとしたのですが、水が流れる中での作業ですから止めることはできませんでした。水の力ってものすごいんですよ。



地下鉄入口の止水板設置のタイミング

～お客さまに不便をかけたくないと悩む～

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

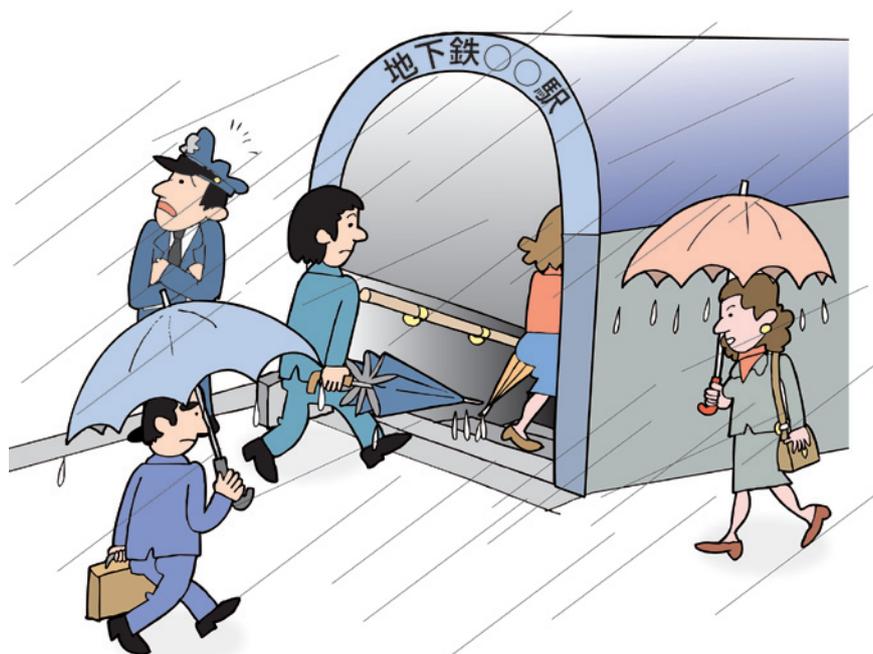
水が来てからじゃ遅いので、水が来る前に止水板*を取り付けるとなると、今度はお客さまに不便をかけることになってしまいます。

低い止水板だったら「通ってください」って案内はできるんだけど、45センチ以上の高さの板をまたいでもらうとなると、そこに椅子とか踏み台みたいなものを置くことも考えなくちゃいけないし、そばに人を配置しておかなければなりません。

早めに設置する方が良いことは分かっているけども、電車が動いているのにお客さまがホームに入れない状況にはしたくないという気持ちがあります。

電車の運行に関しては、線路がどこまで水に浸かったら止めるっていうような基準はありますが、止水板の設置は現場に任されていることが多いのです。営業時間中に止水板の設置をするかどうかの判断は、本当に難しいと思いますね。

*止水板とは、建物や構内の出入口に設置して、水の浸入を防ぐ板のこと。



地下鉄の軌道内に水が入ったら大変

～必死の作業で、翌日運転再開～

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

地下鉄って、駅の部分が少し高い位置にあって、駅と駅の間はそれより低い位置になっていて、少しぐらいの浸水なら駅まで水が上がってこないようになっているんです。

でもあの時は、入ってきた水を排水ポンプで吸い上げ、近くの川に流そうとしてもその川が満杯で水を排出できず、駅の方まで水が来てしまいました。

電車を左側の線路に行かせたり、右側の線路に行かせたり、線路を動かす『転てつ機』というものがありますが、電気で動くものなので、それが水に浸かると電車を走らせたい線路の方に動かしたくても動かさない状態になってしまいます。

軌道内には他にも電気系統のものがたくさんありますから、あるものは部品を交換し、あるものは完全に乾かすというやり方で対応しました。

地下鉄は市民の足ですからね。「2日、3日は動かせないよ」という声もありましたが、必死で作業をした結果、翌日には運転を再開することができました。



漏水がお客さまの頭に落ちないように徹夜で作業

（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

駅のホームやコンコースまで水が入りましたから、どこも泥だらけなんです。早めに運転を再開させようと、徹夜で掃除をやりました。営業するからには、お客さまに迷惑をかけないようにせないかんからね。

天井に入った水がすぐには全部落ちきらんわけやから、天井をビニールシートでおおって、なるべく端っこの方に水が集まるように工夫して、その下にバケツを置きました。天井の中に入って拭いたりもしました。お客さまの頭の上に水が落ちないようにと。

完全に水気を拭き取っておかないと、カビ臭くなってしまいうんです。天井や壁は張り替えましたが、濡れた部分を完全に拭き上げることは難しく、臭いはだいぶ長い間続きました。

コンコースの床は、ゴム製のモップのようなものを持ち、数人が一斉にすみまで行っては帰るということを数え切れないほどくり返しました。

電気関係の人は電気系統の修理、施設関係の人は雨漏り箇所の復旧というように、それぞれの持ち場で懸命に作業しました。



エスカレーター上の天井からドッと水が！

～見えないところに水害の余波～

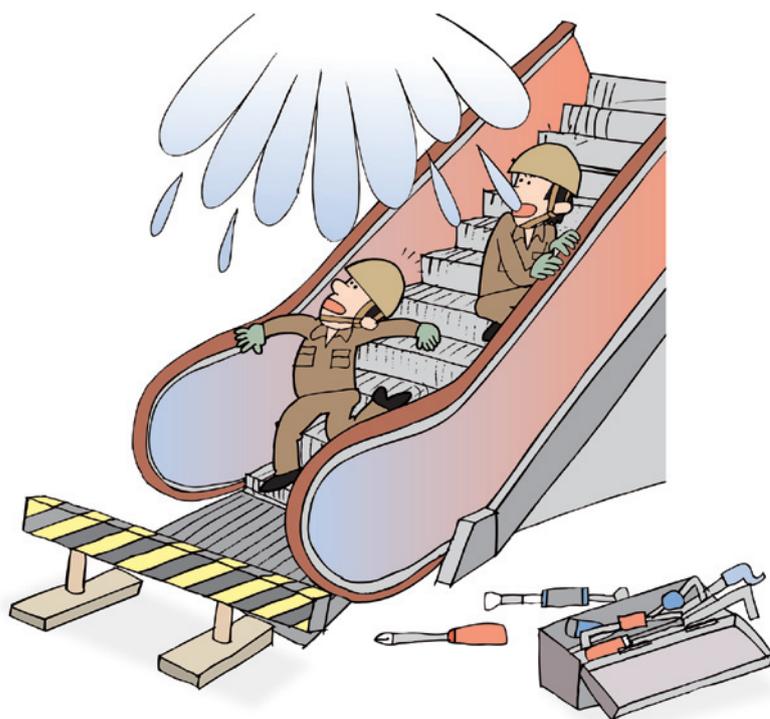
（福岡市 50代 男性 地下鉄職員）

私は施設担当で、ちょっと気になるところがあって、休みの日に現場に行きました。ホームや出口の天井はだいたい金属製なのですが、そこは石膏ボードだったのです。

案の定、エスカレーターの上の天井が水が入り込んで膨らんどった。急いでエスカレーターを止めてもらい、ボードに穴を開けたとたん、水がドッと壊れたボードとともに落ちて来ました。それまでポトンポトンと落ちよったけん、これはだいぶ水がたまるとるなと思っていました。

お客さまは天井まで気にしないから、気づかずにエスカレーターを使っていたわけで、何事もなくすんで良かったなと胸をなでおろしました。

水は低い方に流れますから、目にみえないところでも上からジワジワと落ちてきて一番低いところにたまるということなんですね。だから、運転再開後も気を抜けませんでした。



ボランティアを受け入れてもらうのも大変

～お年寄りの警戒心高く～

(岩国市 40代 女性 看護師)

被災したのは、川沿いに家がポツポツと20軒ぐらい点在している集落でした。当時、ボランティアさんたちが片づけに来てくれたんだけど、「ありがとうございます」って、丁寧に断ってるの。目が「お家に入らないで」って言っている。助けが無かったら片づく訳ないのを分かっているのに。

「でも、お婆ちゃんどこで寝るの?」と言うと、「2階はかつかつ無事やから、濡れてはおるけど、ちょっと濡れてないスペースに布団敷いて寝る。土日になったら、東京と大阪から息子らが来るから」って。土日までまだ5日間ぐらいあるのに。

40代のご夫婦と70代の老夫婦では全然違うんですよ。人手が来たら、「ほんなら片づけてもらおうね」って前向きに言われるのは50代ぐらいまで。70代になると、放心状態になっている上に、よそから来た人に対する警戒心が強いんです。

幸い、私はこの地域で育った身ですから、「ああ、あんたあそこんとこの娘さんかね」という話から、お掃除を始めることができました。身近な人の顔が無かったら、ボランティアさんたちも片づけに入れんことも多いのです。



高校生を話し相手に笑顔のおばあちゃん

～集落総出でボランティア～

(岩国市 40代 女性 看護師)

被災した集落では、そこに住む人たちが総動員で水害のあと片づけをやりました。家がどっぷり水に浸かっているのに、毎日毎日救援物資を配る手伝いをしてくれたおばあちゃんもいました。配って歩いているから、自分の家に救援物資が来たときに受け取る人がいなかったというおまけ付きでね。

中学生、高校生も手伝ってくれました。「もう、あんたら一緒にお茶飲もうや!」と言って、高校生とお茶を飲んでいるおばあちゃんが一番嬉しそうでした。私たちが泥かきするよりもずっと。

やっぱり、しゃべりたかったんです。命はかろうじて助かったものの、家中泥だらけになって何から手をついたら良いかもわからず不安がいっぱい。そんな時、孫みたいな高校生と話をするだけで、すごくホッとしたんだと思います。



入れ歯流され、体調こわすお年寄り

～同じ目線で気持ち汲みとる～

(岩国市 40代 女性 看護師)

私は看護婦ということは前面に出さずに、「同じ地域の住人ですよ」という姿勢で活動していました。「薬が流れた」という話が出れば、「何の病気なの?」と聞く。たまたま免許を持っていたという感じで。

食べる所は1階、寝る所は2階でしょ。洗浄液に浸けた入れ歯は下の洗面に置いてあるから、水で流されてしまって、食べようと思っても歯がないという人たちもいました。

2～3日で歯が入れば問題ないかっていうとそうじゃなくて、その2～3日のあいだに食べる物がいつもと違うとなると、私らが体調を取り戻すよりも高齢の方はかなり時間が掛かるし、実際にそれがきっかけになって後々体調を崩すおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいました。

「食べれんかもしれん。よう食欲は無いけえ」、「でも、食べにゃいけんよ」という会話の後で、よく事情を聞けば入れ歯が流れたということですね。同じ目線に立たないと被災者の方からなかなか近づいてくれません。気持ちを汲んでやるのが精一杯でした。



「避難勧告」発令で、企業の社宅に避難

～地域応援協定がさっそく生きた～

（平塚市 60代 男性）

当時私は現役で、地域と応援協定*を結ぶ会社側の代表として、自治会長さんと話しをする立場でした。「40年間住んでいて一度もなかったから」と言うか、4つもダムが整備されているわけですから、水害なんて想像したこともありませんでした。

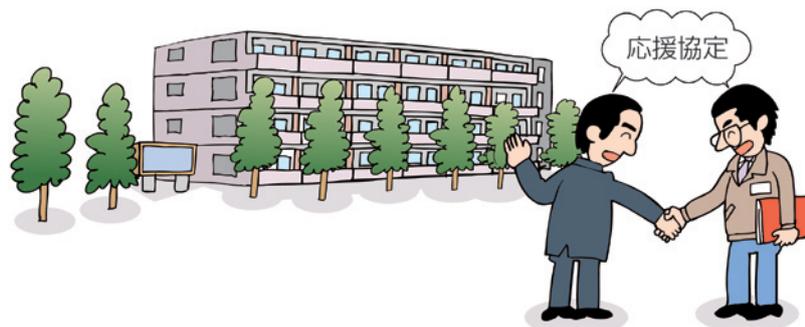
でも、その数年前にインド洋などで大津波が発生し、大きな被害が出たのをニュースで見て、自分たちの地域に津波が来たらお手上げだなと思いました。海と川に近いただけでなく、回りは平地ばかりですからね。津波に襲われたら逃げ場がないぞということで、コンクリート造の4階建ての社宅の2階以上を避難場所としてはどうかと考えたわけです。

当時の市長からも、企業のマネジメントのノウハウとか、資産とかを地域にどんどん提供してくださいと言われていたこともありましてね。防災管理課の課長さんと相談しながら半年で協定の締結にこぎつけました。

それが企業と市と地域で交わした協定の第一号となりました。もし、協定がなかったら、避難勧告*発令と言っても、どこに避難するか、みんな迷っただろうと思いますね。雨の中を1キロ先の中学校に行きなさいと言っても、数人避難するかどうかでしょうね。協定を知っていたから、百数十人というたくさんの人が迷わず社宅に避難できたのではないかなと思います。その年の1月に調印して、9月に台風。タイムリーでした。

* 応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。

* 避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。



避難勧告が出て夜中に避難

～解除まではと120人が集まる～

（平塚市 60代 男性）

あの日、午前3時半ごろ、市から避難勧告*が出ました。相模川が増水したということだね。私は自治会長になって初めての年でしたから、あわてたというか、何かなんだかという感じでした。夜中だし、どうしようと。でも知らせなきゃいけないなと。組長のところに行って「みんなに声をかけてください」と頼んだり、幹事に手分けして電話で知らせるようお願いしたりしました。

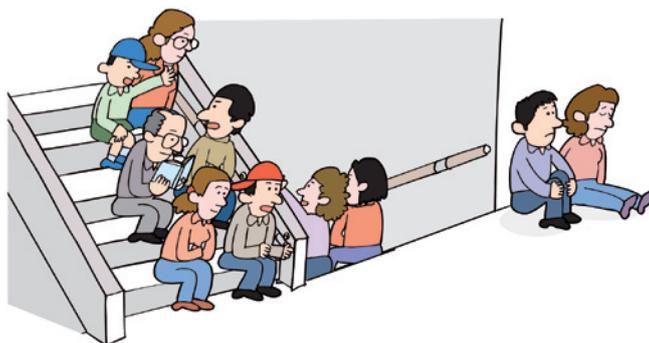
それでも、当時、雨は大した降りじゃなかったので、「パソコンで見ているけど、まったく心配ないですよ。ちゃんと情報を見て、必要なら行きます」と言う方もおられて、「じゃあ、よく見ていて逆に我々に教えてください」といったやりとりもありました。

50メートルも行けば川が見えますからね。行ってみると、水はまだ下の方でした。住民の中には、「これでまだ水かさが増えるのか」とか、「もしこれ以上状況が悪くなった時はどうしてくれるんだ」とかいう声もありましたが、勧告が出たからにはということで、総勢120名ぐらいが応援協定*にしたがって、近くにある工場の社宅に避難しました。

社宅と言っても従業員の方が住んでおられますから、部屋には入れません。避難勧告が解除になる7時半ごろまで、みんな廊下や階段で過ごしたわけです。「もし、避難指示が変わったらどうしよう」とか考えていたから、不思議と長く感じませんでしたね。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

*応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。



「とりあえずの避難」でも、必需品は持参して

～夏でも必要だった毛布～

（平塚市 60代 女性）

避難勧告*が出て、私たちは応援協定*を結んでいる社宅に避難させてもらったわけですが、社宅には人が住んでいらっしゃるの、2階と3階の廊下や階段で避難勧告の解除を待っていました。

中には、生まれたばかりの赤ちゃんもいて、民生委員の私としては、ちょっと心配だったのですけれど、社宅の組長さんの好意で家の中に入れてもらえました。

それから、血圧の高いお年寄りがいらして。夏とはいえ、だんだん冷えてくるんですよ。毛布とかもないし、イスもありませんから。かろうじてタオルケットは持っていたので、「これをかけておいてください」とお渡ししましたが、気が気ではありませんでした。

そのうち、社宅に住んでいる方が「赤ちゃんとかはどうぞ」なんて、声をかけてくださったので、そのお年寄りも部屋の中に入れていただきました。廊下にはお手洗いがなくて、トイレもちょっとお借りしたりね。親切にさせていただいて、本当に助かりました。

それにしても、夏でも毛布が必要だなんて、実際に避難してみないと分からないものだと思います。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

*応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。



「避難勧告」を知らせても、誰も避難しなかったアパートの住民

（平塚市 50代 男性）

避難勧告*、避難指示*、僕はそういう区別もわからなかったし、避難勧告が出るなんて思いもしなかった。避難に関する協定を地元の企業と結ばせてもらったということは知っていても、台風が来たから避難しなきゃいけないなんて全然考えてなかったの、電話が来たときには驚きました。

うちはアパートを経営しているので、真っ先に、「アパートの人に知らせなきゃ」と思いました。自分の判断ですけれど、水がくるとすればこの方向。だから、1階の人だけには知らせておこうと、ウインドブレーカーを着、傘をさして家を出ました。

玄関ドアを「コンコン」とたたいて、1軒1軒知らせて回ったけれど、アパートの1階の8軒あるうちの3軒ぐらいいは、居留守を使ったか、そもそも出てこない。その他は一応出てきたんだけど、時間が夜中の3時半でしょう。結果的に、1人も避難には参加しなかったですね。みなさん若くて、お一人の方ばかりですから、自治会の活動とか、ゴミの件とか、集合住宅でよく問題になるけれど、その端的な例かなという感じはしました。

その後、相模川の水位がインターネットで分かるようになったので、雨が降るとすぐに、今は1メートルだとか、2メートルぐらいたとか、注意して見るようになりました。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

*避難指示とは、被害の危険が目前に切迫している場合等に発せられ、「勧告」よりも拘束力が強く、居住者等を避難のため立ち退かせるための行為のこと。



「避難勧告」ってどこから来たの？

～情報の出所わからず、どうしてよいか迷う～

（平塚市 60代 女性）

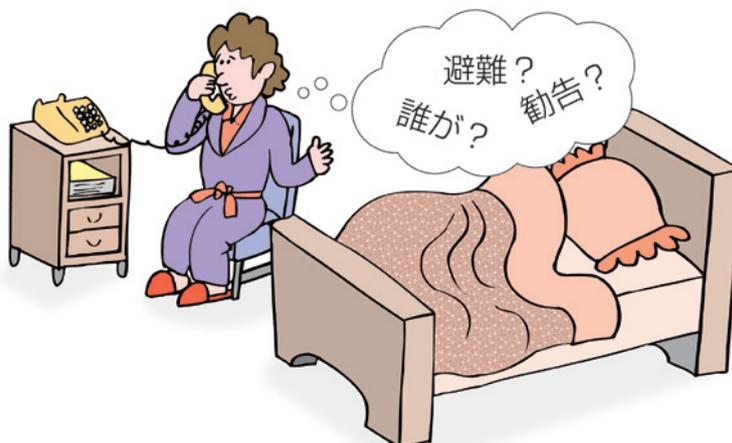
電話がかかってきたのが午前3時半ぐらい。夜中ですからいたずら電話かなと1回は無視しました。でも、台風が心配で遅くまでテレビを見ていたこともあり、2回続けてかかってきたので、「もしや」と思って電話をとりました。

電話はご近所からでした。班単位でかけてきたようで、「台風が来ているから、避難するように言ってきましたよ」とのことでした。「避難勧告*って、どこから連絡が来たのですか？」と訊いたら、「わかりません」と。だれが言い始めたのか、正式な情報なのかどうかもよくわかりませんでした。

最初に、隣の茅ヶ崎市の広報車がやってきたんですよ。隣の市との境界が入りこんでいるからすぐ近くに聞こえるんです。だから、ご近所の中にはそれを聞いて慌てて隣の市の避難場所に行った人がいたそうです。次に、平塚市の広報車も来たので、「ほんとうだ、じゃあ行かなきゃ」と、いつも用意してあるリュックを背負って、広報車が言っていた避難場所に行きました。

まだ数名しか避難してきていなかったもので、民生委員をしている私はすぐに引き返して、ひとり暮らしの方の戸をトントンと叩いては、「とにかく起きていてくださいね」、「もしかして行かなきゃいけなかったら、必ず連れに来ますから、1人で出てこないでくださいね」と言ってまわりました。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。



「避難勧告」発令で、手ぶらで避難した住民

～貴重品などは持参すべきと反省～

（平塚市 50代 男性）

当時、避難勧告*が出たからということで、「とりあえず命を持ってきてください」という感じで、避難場所に集まった。だから、みなさん手ぶらでしたよね。貴重品とか食料とかも持たずに。

私たちが避難したのは、一時避難のために用意された企業の社宅の2階以上の廊下部分で、宿泊はできないという決まりでしたから、万一、相模川の水位が危険水準に入って「避難指示」が出れば、そこから800メートル先の中学校に移らなければなくなる可能性もありました。

もしそうなったら、多分ものすごい混乱状態になるなという不安がありました。だから、その後に、自治会の避難誘導プロジェクトチームがつけられたのです。

「避難勧告」の延長線上に「避難指示」*があるわけでしょ。初めてのことで、そんな余裕もなかったこともあると思いますが、一時避難のときに、やっぱり持っていくものは持っていかないといけないなど、反省しています。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

*避難指示とは、被害の危険が目前に切迫している場合等に発せられ、「勧告」よりも拘束力が強く、居住者等を避難のため立ち退かせるための行為のこと。



とっさの機転、「広報車のマイクを2階に向けて!」

（平塚市 60代 女性）

避難場所で、近所の人に「うちの隣の人に来ていないんです」と言われ、一緒に行つて、トントンと戸を叩いたけれども出てこられないんですよ。電話をしても応答なし。困っているところに、ちょうど消防の広報車がまわってきたので、「すみません、ここの人と連絡がつかないのです。2階で寝ていらっしゃるのはわかっていますので、マイクを2階に向けて呼んでみてください」と頼みました。そうしたら、出てこられました。電話が1階にあるとのことで、「息子に、夜寝るときは子機を持って上がれよ、と言われていたんだけど、ついつい面倒くさくて」と言っておられました。そうこうしているうちに、避難勧告*が解除になり、何事もなくほんとうによかったなと思いました。

今、個人情報とかの問題で、連絡網もないんです。昔の自治会名簿は残っていますが、新しく越してこられた方の中に入っていないんです。それでも、うちの班が一番古くからあるので、みなさん何も言わなくても隣近所のことを心配して、「あそこの人が来ていない」となるのです。やっぱり、名簿よりふだんのおつき合い、これが一番ですね。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。



避難の経験が地域の人を結びつけた

～若いお父さん、お母さんも地域の活動に参加～

（平塚市 60代 男性）

あの時、「避難勧告」*が出て、応援協定*どおりに近くの工場の社宅に避難し、「解除」になるまで地域の人たちが一緒に過ごすことになったのですが、そのことが防災を意識するきっかけになったかもしれないと思っています。

実際、若いお父さん、お母さんが防災訓練などへ参加するケースも多く、子どもさんも連れて来て、子どもの前でいい格好をしたいということもあるのか、意外と積極的に動いてくれるんですよ。自治会としても子供さんにはお菓子もちょっと用意しています。

僕は自治会長の立場ですが、公園の掃除は単に公園をきれいにするためじゃなく、助け合うことを目的にしているものだと考えています。きれいにするだけなら専門の人がすればいいことですよね。清掃は月2回で年間10回、あと大そうじもやっていますが、延べにすると二百何人が参加しています。

その公園は、10年ぐらい前に市に頼んで作ってもらったもので、記念に植えた桜の木の下で毎年お花見をしています。そうやって、コミュニケーションを深めていけば地域の力が上がって、当然防災にも役に立つ。防災の行事だけを一生懸命やろうとしたって無理で、日ごろからどうやってつき合っていくかだと思いますね。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

*応援協定とは、行政機関と民間事業者又は他の行政機関等との間であらかじめ協定書を交わし、災害時における人的・物的支援についての協力を確保するためのもの。



前もって避難の方向を決めていた

～山崩れに迷わず避難、命助かる～

（宇部市 40代 男性 行政職員）

あるお宅の話なのですが、ご夫婦でお住まいで、お昼ごろお膳にご飯とおかずを並べて、「さあ、ご飯食べよう」って言っていたら、山の方で音がしたんですね、ゴーンゴーンって。「あれ？何でなんだろう？」と思って見たら、まさに山が崩れてきていて、土石流がダーッと押し寄せてきていたのです。

で、「こりゃいけん」と思って、ご主人はステテコとランニング一枚だったんですけど、パッとシャツをつかんで、奥さんと一緒に道の無い裏山に逃げ込んだんですよ。「何でそっちに逃げたんですか」って聞いたら、「家を建てた時に、何かあったらどこに逃げるか？ひとつは裏山もあるな」とご夫婦で話し合っていたとのこと。

道ばたに車を置いていましたが、そこは土石流の流れる方向にありました。もし道の方に逃げていたら、絶対命はなかったと思いますよ。

今自分がどんなところに住んでいて、どういう危険性があるのか、過去に地域でどんなことがあったのかなどをそれぞれが学んでおけば、そのために何を備えるか、どこに逃げるのかを具体的に考えていくことができますよね。大切なのは、具体的に考えるということと自分の身は自分で守るという姿勢だと思います。



受話器を置いた途端にまた電話

～ 1本の木が倒れても何件も通報～

（宇部市 50代 男性 行政職員）

当時は、受話器を置いた途端に電話が鳴る状態でした。119番とか110番とは違って、受けたら自動的にその場所の地図が出るわけではありませんので、まず住宅地図を開いて、住所や電話番号を訊き、「お近くの目標物はありませんか」と言って、お店とか病院とかバス停とかで場所を確認し、『災害対応票』に記録していきま

した。
「道路の木が倒れて通行の妨げになっている。何とかしないと」という電話を、見る人見る人がかけてくるので、木が1本倒れただけでもその通報が何件にもなります。結果的に通報記録は1200件にのぼりました。

「裏山が崩れた」という通報も、ほんの少し崩れた場合もあるし、土砂がドーンと家に当たっているというケースもあります。どの程度重要なものなのか、十分聞き取ってから判断しなければなりませんから、1件の電話にかなり時間がかかります。

こういった電話対応に追われ、河川の水位や雨量の監視業務がどうしても疎かになりがちですので、これ以降、応援職員に主に電話対応をやってもらうといった役割分担を明確にしました。それが今年の大雨の時に役に立ったというか、我々は冷静に監視にあたることができました。



1軒ずつ1被害現場を確認

～職員の実験と土地勘でカバー～

（宇部市 40代 男性 行政職員）

県や国は早く被害報告を出すようにと言ってきますが、床上浸水にしたって、1軒1軒現地に行って確認しないと市の公式発表はなかなかできないんですよ。すぐにマスコミからの問合せが殺到しますからね。

例えば、「山が崩れた。助けてくれ」という市民からの電話を受けて、「現場の詳細いことは分からないけれど、とにかく直ぐ行ってください」と消防に出動要請したら、あとで現場から「崩れていませんよ。どうもないですよ」といった連絡が入るなんてこともあるんです。

住民の人は不安になって大げさに言われることもありますから、簡単に鵜呑みにはできないのです。「全壊」とか「半壊」とか言われても、調査してみると一部損壊や被害無しとかいうケースもあるので、切迫した声だから嘘ではないと感じても、やっぱり確認しなければなりません。

そういうのは、地道ないわば『点』の作業。職員も経験とか土地勘とかを持っていないと、その点の情報をつないで『面』にすることは難しいですね。ですから、『人』を育てることも大事だと思いますね。



水害対応は長期戦

（宇部市 50代 男性 行政職員）

水害は復旧活動も大変ですから、ひとつの災害に1週間ぐらいかかりっきりになります。当時も課の5人がローテーションを組んで、2、3時間家に帰り、お風呂に入って仮眠してはまた出て来るということを4日ほど続けました。

市民の中には、夜仕事をして昼間寝ていらっしゃるという方もたくさんおられます。で、災害ゴミの出し方などの情報が入ってきづらいのか、夜の仕事が終わってから問い合わせる人も少なくありません。また、ちょっと一杯ひっかけ、災害に対するいろんな想いを誰かにぶつきたいといった感じで、電話をかけてくる人もいます。

最初の3日ぐらいは、大変なことが起きているということで、アドレナリンがすごく出ていて頑張れるんですが、そのうち疲れがたまってきて、「倒れて病院に運ばれた方がいいな」なんて思ったこともありました。

私はその年に他の部署から出向してきたばかりで、市民と直接向き合うことの大変さを痛感しました。



避難勧告発令の難しさ

～空振り率がれば勧告の価値下がる～

（宇部市 40代 男性 行政職員）

私は気象予報士ですが、水害が起こる前、例えば、3時間前にそこでこれだけの雨が降るって分っていたかのように言われることがあります。実はある程度の範囲でその可能性があるとは分かっていてもほんとにその場所に大雨が降るとはわからない場合がほとんどなんです。だから、ゲリラ豪雨のような局地的大雨の場合、早めに避難勧告*を出すことは、技術的にも非常に難しいのです。

マスコミや住民から「何で避難勧告を出さなかった」みたいに言われるからといって、「避難勧告もとにかくはやく半日前から出しときゃええやんか」みたいなことになれば、空振り率は95パーセント位になってしまいます。「何も起きないね」という状況が続き、勧告そのものの信頼性が下がります。

もちろん行政の責任として被害が予想される場合にきちんと避難勧告を出すことは大切ですが、それが必ずできるわけではない、つまり避難勧告を事前に出せない場合もあるということも分かってほしいなと思います。

避難勧告や避難指示*の意味、土砂災害警戒区域*の意味、大雨注意報や大雨警報の意味、注意報はあるけど警報がないものなど、自分や家族の命を守ることにつながる情報っていうのを繰り返し、かつ、体系的に学んでおくこと、特に自分で判断する力を身につけておくことがとても大事なことだと思いますね。

*避難勧告とは、その地域の居住者等を拘束するものではないが、居住者等がその「勧告」を尊重することを期待して、避難のための立退きを進め又は促す行為のこと。

*避難指示とは、被害の危険が目前に切迫している場合等に発せられ、「勧告」よりも拘束力が強く、居住者等を避難のため立ち退かせるための行為のこと。

*土砂災害警戒区域とは、土砂災害のおそれがある区域のこと。



「来る、来る、来る」路地はまるで川のように

～川の氾濫の大変さ実感～

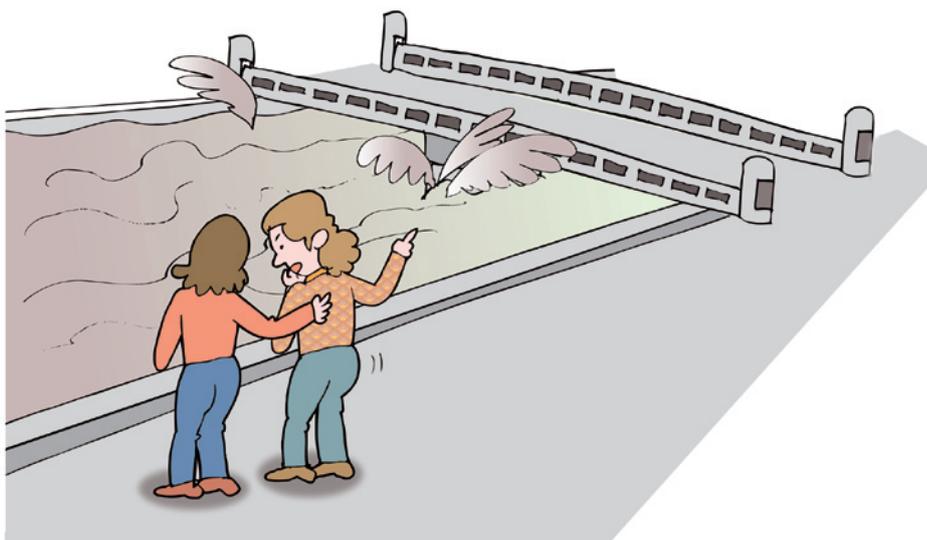
（山陽小野田市 50代 女性 菓子店経営）

朝起きたときに川の水の音を聞いて、「あ、違う」って思いました。で、姉と川の様子を見にいくと、水の勢いは今まで見たことがないほど速く、川の水が橋にぶつかって跳ね返っていました。

そのうち、橋の欄干のすき間から水があふれ出し、かまぼこ状の橋の上を川のように流れ出したのです。「来る、来る、来る」って感じでね。私たちは水に追いかけるように家に帰り、とりあえず母と犬を2、3軒先の敷地がちょっと高い知り合いの家に避難させました。結局、我が家に水が浸入してくるのを止めることはできませんでした。

川からどんどん水が上がって来るし、側溝は水がはけない状態になっていますから、川と道路の差がなくなってきて、細い路地はまるで川のようにダーっと水が流れていました。

長いこと住んでいて今まで水に浸かったことが無かったので、「水は来ない」と思っていました。被災して初めて「川が氾濫するって大変なことなんだな」って思いました。



土のうが必要になるなんて夢にも思わず

～今までの経験が裏目に～

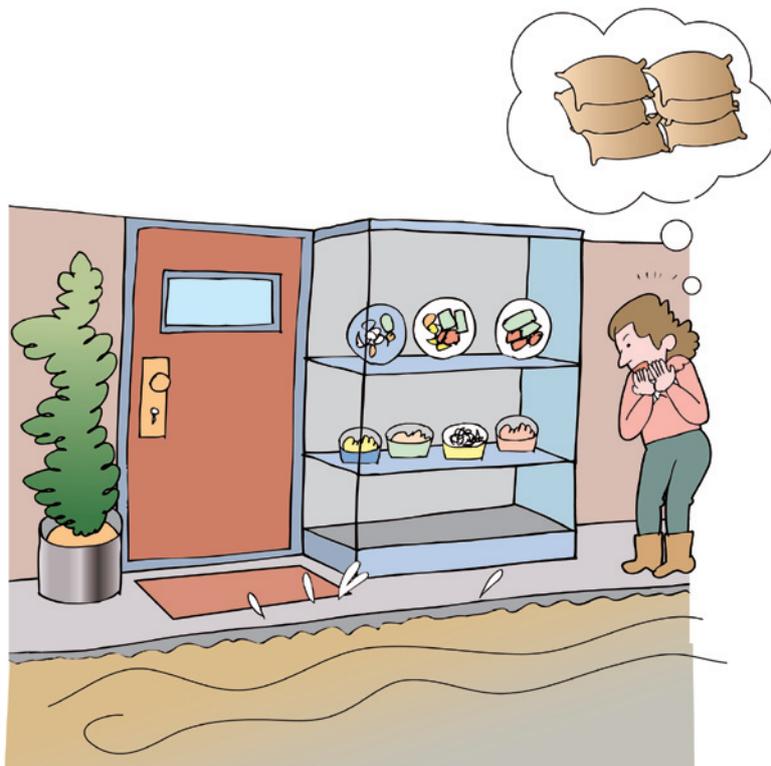
(山陽小野田市 50代 女性 菓子店経営)

それまでは徐々に徐々にという感じだったんですけどね。目に見えて水が増えてきたのは、ほんの5分か10分ぐらいの間でした。で、「仕方ない。避難しようか」って感じで、近所の高台にあるお宅に避難させてもらいました。

水がヒタヒタと店の方に押しよせてきた時には、「こういう時は土のうが欲しいね」って本気で話をしていました。

昨年、川向こうが水に浸かった時でもうちの方は大丈夫だったし、今までそういう危険を感じたこともなかったので、土のうが必要になるなんて夢にも思っていないでした。だから、店に水が浸入するのを防ぐ手立ては何もありませんでした。

「万一水害になったら、物なんかに執着しないで、命だけ持って出たらいい」としか言えませんね。本当に水はあっという間にやってきますから、一人暮らしのお年寄りを誰がどこに避難させるかは、前もって決めておくようにしなければいけないと思いますね。



被災者への声かけにも心配る

～気持ちが通じた時に小さな喜び～

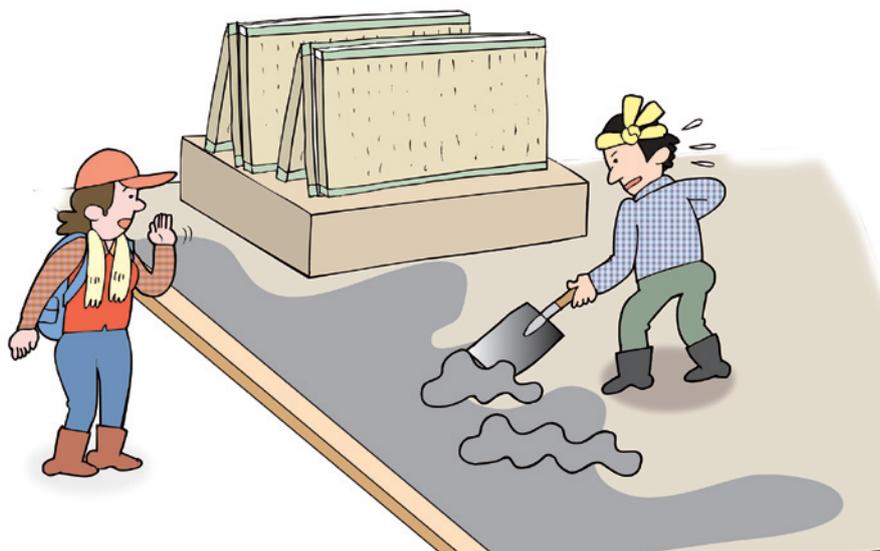
（山陽小野田市 30代 女性 看護師）

私は被災した商店街の中を徒歩で回っていました。自分自身が大きな水害が無いところで育ってききましたので、活動を始めた当初は、見ればがんばっていらっしゃるのが伝わってくる被災者さんへ「どうですか？」と声をかけることにためらいがありました。だんだん数を重ねるうちに少しは慣れてきましたが、やっぱり難しいです。

ナースという立場上、医療的な観点から、サンダルで作業をしてケガをされた方に「自分たちの身を守って欲しい」というような指導をするのですが、翌日、その被災者さんがわざわざ作業の手を止めて、「昨日言われたから、ちゃんと病院へ行ってきたよ」と言ってくださった時は、自分の言ったことを受け入れてくれたのだなと嬉しくなりました。

「体調崩されてないですか」、「ケガとかされてないですか」と表情を見ながら声をかけますが、保健センターの方とか他にもいろいろ声かけしているので、「また来た」と言われたり、作業の手を止めたくないのか嫌な顔をされることもありました。

ボランティア活動の中で、「寄り添う」というか、言葉は伝えられなくても「ちゃんと心配している人がいるよ」ということを伝える大切な時期があると聞いていますが、そういう力になれたらいいなと思いますね。



「休んでね」と言ってる自分が休んでない

～ボランティアもスタッフもついつい熱中しがち～

（山陽小野田市 30代 女性 看護師）

猛暑でしたから、冷やしたタオルを入れたクーラーボックスを肩にかけ、配って回りました。もっと遠くまで届けたかったけれど、やっぱり徒歩しかありませんから、ボランティアセンターから行ける範囲ってすごく限られてしまうのです。それに、ある種の力仕事ですから、女性の私たちには体力的にきびしいものがありました。そういう時は、もっと男性のサポートがあつたらいいなと感じました。

ボランティアさん達の健康管理も仕事のひとつでしたから、センターに戻ってきたボランティアさんには、すぐに涼しいところで休むように言いました。「建物の中にいても熱中症になりますからね」って言いながら。

休憩をとったボランティアさんを送り出してから、「あ、自分もご飯食べてない」って気づくこともありました。みんなには「休んでね」と言っておきながら、「自分が一番休みをとってないな」って思うことも。

ついつい一生懸命になっちゃうのはボランティアさんも同じだと思いますが、反省しなくちゃいけませんね。



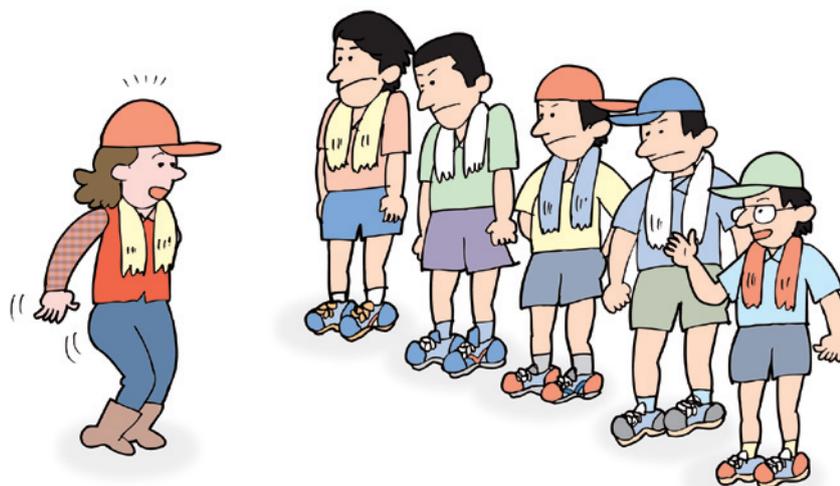
軽装での復旧作業は危険がいっぱい

（山陽小野田市 30代 女性 看護師）

高校のサッカー部らしき一団がボランティアに来てくれたのですが、夏だから涼しそうな格好で、半袖、短パンなんです。サンダルはさすがにいなかったですけどね。私は「ちょっと待ってください」と言って、センターの人に相談に行きました。「来られたものを帰すことはできません」と言うので、「それはそうですね。じゃあ、作業場所をちょっと考えてもらえますか」という話をしました。

また別の方で、思いっきりサンダルっていうかミュール、ヒールのある靴で来られた女性に「履きかえられるんですか」と聞いていたら、「いえ、もうこれ捨てますから」と。そういう人をつかまえては、「あそこで長靴借りられますから、必ずお願いします」と伝えました。

初めてボランティアをする人は、どういうことをするのかも分からずに、「早く行きたい、早く力になりたい」という思いで来られるから無理もないなあとは思いますが、軽装で災害の復旧作業をすることは、ケガや病気の危険が高まるんだってことを知っておいてほしいなと思います。



ボランティアの健康管理にひと役

～災害支援ナースは、被災者にも勇気を～

（宇部市 40代 女性 看護師）

私は、昨年『災害支援ナース』*に登録して、防府市の災害支援を経験しました。今年山陽小野田市で、主にボランティアさんに目を向けた活動をしてきました。「定期的に水分を摂られていますか?」、「お弁当は風通しが良い、涼しい場所に置いていますか?」と声をかけて回ります。ケガをされた方がいると聞けば、すぐに手当に向かいます。

ボランティアの方って、ついつい一生懸命になって、自分の健康管理をおろそかにしがちですから、そこが私たちの出番なんです。

ボランティアさんのいるところには当然ながら被災者の方もいらっしゃるのですが、線引きはせずに、被災者の方へも声をかけます。今回は記録的な猛暑でしたので、ギンギンに冷やしたおしぼりや飲み物をクーラーボックスに入れて、配って歩きました。

家の中は泥だらけで、とても住めるような状況じゃありません。中には、私たちの顔を見て涙を流される老夫婦もおられました。子どもさんは県外に出ていて、今は2人暮らし。きっと心細かったのだらうと思います。

*災害支援ナースとは、看護協会の研修を受け、災害が起こった際に支援活動をする旨に登録しているナース(看護師)のこと。



ボランティアさんの熱中症対策に気を配る

～素足にサンダルは、破傷風の危険～

（山陽小野田市 30代 女性 看護師）

今回の災害は猛暑の中でしたので、私はボランティアセンターの救護班の一員として、「冷たい飲み物とおしぼりを持ってきているので、休憩しましょうか」と声をかけて、作業を中断して日陰で休んでいただくなど、熱中症対策に努めました。

ボランティアの方は作業着に長靴を履くなど、ちゃんと準備ができている人が多いのですが、被災者の中には、素足にサンダルを履いていたり、手袋をせずに素手で作業をされている方もいらっしゃいます。で、「破傷風菌が入る可能性もありますよ」と声をかけます。

ただ、私たち『災害支援ナース』*の知名度もまだまだ低くて、高血圧の持病のある方の血圧を測ってあげたところ、後で保健センターに「看護師が来て血圧を測ったけど、請求が来るの?」という電話が掛かってきたこともありました。

被災した昔からのお店に、骨董品の買い付けにくる業者もいますからね。水害で打ちのめされているところに、そういった営利目的の人たちも入ってくるので、被災者はよけい神経質になるのかなあって思います。

*災害支援ナースとは、看護協会の研修を受け、災害が起こった際に支援活動をする旨を登録しているナース(看護師)のこと。



マンホールに片足バコーン

～泥水で蓋が浮いているのに気づかず～

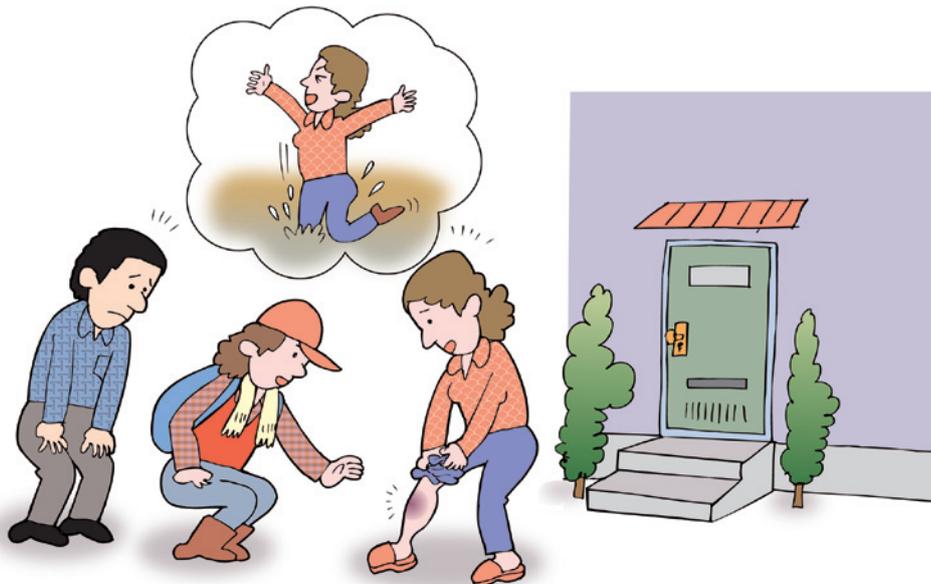
（山陽小野田市 30代 女性 看護師）

庭先に犬がいたのでつい声をかけると、飼い主さんが「実はこの犬、川が氾濫した時に流されたんだけど、泳いで帰ってきたんですよ」って。「偉いね」なんて話をしていて、そこの奥さんが出てきて、「ちょうど良かった。看護婦さんなら診てもらえる」と言いながら足を診せたのです。

足の付け根まで一本丸ごと、すごい内出血でした。「どうしたんですか？」って言ったら、「マンホールの蓋が浮いていたのに、泥水で見えなくて、落ちちゃった」と言うのです。「バコーンッと片足落ちて、『マンホールだ!』と思って自力ではい上がった」とも。表面上傷は無いけれど、ものすごく赤く腫れていて、ちょっと熱があるような感じだったので、足を冷やしてあげてから、病院に行くよう勧めました。

お母さんって、被災して片づけをしながらも、ちゃんと家族に3食食べさせなきゃいけないってことがあるから、気にはなるんだけど自分のことはさて置いて、という感じになっちゃうんですね。

痛かったと思いますよ、本当は。けど、耐えとったんよね。別れ際に、「ちょっと安心した」と、奥さん。そのひと言が心に残りました。



重い長靴を引きずって歩く

～軽い長靴、あったらいいな～

（宇部市 40代 女性 看護師）

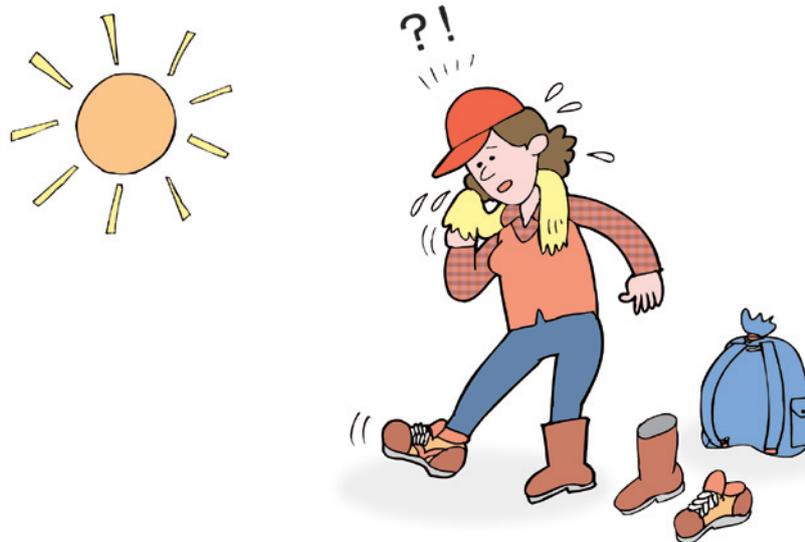
今回の水害は、猛暑の中でのボランティア活動となりましたが、これが寒い冬だったらどうなのかなって考えちゃいますね。地震と水害では全然対応が違うし。

水害の場合は長靴が基本中の基本なんだけど、水が引いた後は、歩くのに一番疲れるアイテムになってしまい、重たそうにカポカポ引きずって歩いていました。

「意外にスニーカーが要るよね」って、「水が引いたらスニーカーじゃないと歩けないよね」って仲間同士で話をしていました。

でも、やっぱり足元までちゃんと気を配っている自分の装備を、被災者やボランティアの方に見せるっていうことも必要だから、重いけど履いとこうかなっていう気持ちがありました。

スニーカーとかで作業しているとつま先から水が染みしてくるでしょ。するといつの間にか雑菌が入って、爪の皮が剥がれてしまうこともあるんです。だから濡れている所に入るときには、絶対長靴。願わくば、もっと軽い長靴があるといいなと思っています。



「まさか」が現実

～駐車場水没で大損害～

（山陽小野田市 40代 保健施設職員）

まさかこちらの方まで水が上がってくるとは思っていませんでしたので、車は全部駐車場にとめてありました。うちの施設は道路より1メートル20センチぐらい高い位置にありますから、大丈夫だろうと。

それが、近くの川が氾濫したということで、みるみる水位が上がってきたのです。目の前の駐車場がだんだん水没していくのが分かりますから、事前に市にお願いしておいた高台の文化会館の方に車を移動させました。

ワンボックスカーなんかはフロアが高いですから、車両のダメージは軽くてすんだのですが、軽四などのフロアの低いものは水没状態になりました。職員の自家用車は移動させるのが遅れたこともあって、「全損」になって車を買替えた人も何人かいました。

前の道路に腰より少し上ぐらいの水が来たのを見てから、アッという間でした。車は水に浸かったらおしまいですからね。もっと早めに移動させておけば良かったなと思います。



災害はどこでも起こる

～土地のかさ上げも自然の力の前では無力～

（山陽小野田市 60代 女性 保健施設経営）

ほんとうは平たい土地に施設を造るのは嫌だったんです。それで町の方に確かめたら、「10数年前に水害がありました、これからはポンプが3機もつくから大丈夫ですよ」とおっしゃって。それでも何か心配だから土地を1メートル20センチぐらいかさ上げしてから建てたのです。

その前の晩もずっと降り続いていましたし、朝がたにもものすごく降りましたが、ここは大丈夫という頭がありましたので、別の場所にある施設の方を心配していました。

職員から、デイサービスをするかしらないかっていう相談がありましたが、今までもそれほどのことはなかったし、ポンプが働くからという気持ちがあって、通常どおりとしました。まさか近くの川が氾濫するなんて、思ってもいませんからね。

あとで、計画では3機だったけれど実際には1機しかなくて、それも十分に働いていなかったという話を聞いて、もうびっくりでした。でも、あれだけの雨が降ればポンプが3機あっても処理しきれなかったかもしれません。災害が起こらないことが「普通」なんじゃないってことが、すごくよく分かりました。



前年の被災を教訓に連絡体制を整備

（山陽小野田市 40代 男性 保健施設職員）

前の年にも水害を経験していますので、また無いとも限らないということで、各事業所の長を招集しまして、防災に関する対策会議というのをしたわけです。それがちょうど水が出た1週間ぐらい前なんですよ。

非常時の連絡体制などを整備して、電話を掛けて、「こういう状況なので待機しとってくれ」とか「すぐに施設に来てください」とかいう形で訓練を実施しました。

その時は「ならんじゃったら、ええですね」というお話ですましてしまったんですけども、その訓練が終わったところからずっと雨が降り続きよったんです。

通常ですと「待機」、「一次呼集」、「二次呼集」という順番になるんですけど、今回は私が朝の6時半過ぎにここに来た時点で近くの川があふれそうだったので、もう飛ばして「皆さん施設に来てください」とリーダーさんを集めました。通いの利用者さんには、職員が手分けして、「今日は自宅で待機をしとってください」と全員に連絡をしました。

従業員にも抜き打ち訓練をしたりしていたので、本番も混乱なくできました。



物の上げ下げもルールを決めてスムーズに

（山陽小野田市 20代 男性 保健施設職員）

玄関はバリアフリーですから、水が来たらアッという間にドドドーですよ。昨年も水に浸かりましたので、大雨が降った時には、大事な書類や荷物をすぐにテーブルの高さより上にあげるようにしています。

それぞれの持ち場を決めておまして、状況が分かる人間がその部屋のを机の上にあげることになっています。ただ、机のスペースにも限りがありますから、残りは全部2階に持って上がらないといけません。貴重品は2階の決められた場所に運ぶということになっています。

担当の者が周りの人にきちんと指示をするというやり方ですから、あとで物がなくなったとか、分からなくなったということがほとんどありません。水が入った当日も、前日に雨が小降りになったからと一旦下ろしたものをまた上げることになりましたが、手早いものでした。

こういう取り決めって小さなことのようにですが、案外重要なんですよ。



紙おむつがプカリプカリ

～水の浸入防ぎきれず～

（山陽小野田市 40代 男性 保健施設職員）

今年には川があふれたので、昨年とは比べものにならないほどの水が来ました。玄関の外からブルーシートと土のうで水の浸入を防ぐわけですが、想定していた土のうの高さよりさらに上に水が来たせいか、残念ながら完璧にくい止めることはできませんでした。

男性のモモのあたりまで水が来ましてね。玄関のガラスの向こうは、もう水族館状態なんです。外から水圧がかかりますから、シートがドアのすき間に密着するようになってある程度はカバーできるはずなのですが、水が入り始めました。

「じゃあ、どうしようか」ということで、ありったけの紙おむつを出してきて、玄関とエレベーターの周りに置きました。

「とにかく満潮までがんばったら何とかかなる」という頭でおったのですが、どういうわけか満潮になっても水が引かないんですよ。そのうちに、「あっちに水が入った。こっちに入った」というかたちになって、紙おむつがいっぱいプカプカ浮き出したのです。水を吸えば土のうの代わりになると思ったのですが、悲しいかな、そうはいきませんでした。



経験踏まえ、復旧業者を早めに手配

～従業員のケアも忘れずに～

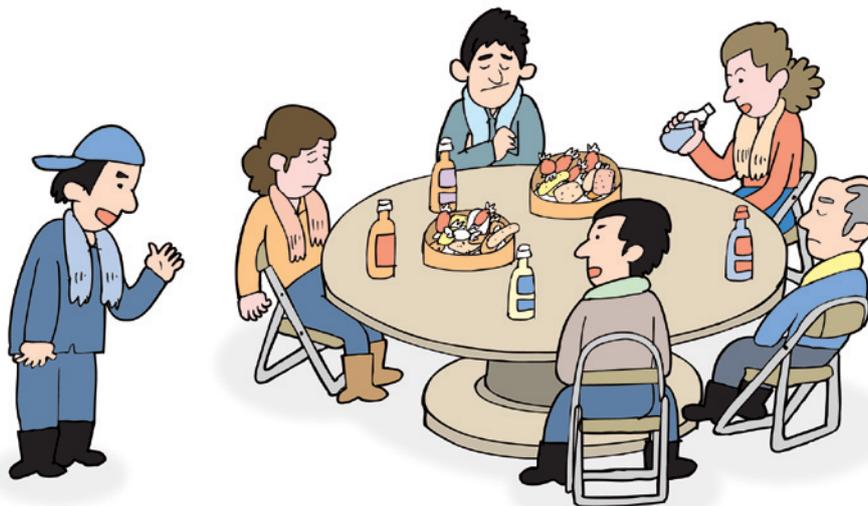
（山陽小野田市 60代 女性 保健施設経営）

昨年は水が入ってから復旧業者等の手配をしましたので、どこも引っ張りだこで、連絡が1分でも遅れると順番がだいぶ後になるということで、施設の復旧も遅れました。

その経験がありましたので、今年は水が引かないうちに皆スタンバイの状態。水が来る前から「これは来そうだ」ということで連絡を入れ、待機してもらっていましたから、すぐに復旧作業にとりかかってもらえました。

それから、従業員の皆さんには、2時間おきぐらいにロビーに集まって手を休めてもらい、復旧作業が続いて疲労がたまっていないか、ご自宅の被災状況はどうかといったことを確認し、「残れる方だけ残ってください」というかたちにしました。

このやり方は従業員に無理をさせないという点で、とても優れたやり方だと思いますね。早く業者さんの手が入ったこともあって、手際良く片付けが進み、休業は当日と翌日の復旧作業の2日間だけで、その次の日からは営業を再開することができました。



1階のお年寄りはゆっくり2階へ

～情報収集して早めの判断～

（山陽小野田市 60代 女性 保健施設経営）

その朝、デイサービスの方の迎えの車から水が出て走れなくなったという報告がありました。急いで確認に行くと、近くの川が今にも氾濫しそうな状態でした。で、デイサービスはお休みということにしました。

施設の1階には、グループホームの2ユニットの18人の方だけが住んでおられるんですけど、ゆっくり朝食を食べていただいてから2階の方へ移動していただきました。スタッフもついて、いつものように食事も出せましたので、歌を歌ったりして、階下が大ごとになっているのも分からずに過ごされていたと思いますよ。

落ち着いてそういうことができたのは、前の晩から气象台や市の危機管理室との連絡をずっと続けていて、「これはもういけない」という思いが強くなっていて、判断がし易かったからだと思います。

県の防災メールも施設の主要なパソコンや私の携帯電話に入るように設定しておりますので、川の水位情報なども入るようになり、役に立ちました。

近くの川が氾濫したのは想定外でしたけれどね。



『災害支援ナース』に欠かせない病院と家庭の理解

（宇部市 40代 女性 看護師）

私は『災害支援ナース』*の皆さんをまとめる立場なのですが、昨年は初めて経験する人ばかりでしたし、看護協会がシフトを組むので引継ぎなどで難しい点もありました。

でも今回は、昨年の活動をきっかけに私たちの普段の横の関係ができてメンバー間の連絡が取りやすくなったし、協会の方も昨年の反省を踏まえて、前日経験した人のうち必ず1人は翌日にも入るような形でシフトを組んでくださったので、よりスムーズに活動できるようになりました。

それに、記録の整理をしっかりとすることにして、当日の活動の報告と翌日への申し送り事項などを短時間で情報収集して、すぐに活動に組み入れるようにしました。

研修を受けに来る看護師は結構いるのですが、病院単位でしか登録許可が出ませんから、個人の志しはあっても、勤務する病院の協力がないと災害支援ナースにはなれません。小さな病院などは人手不足で、許可したくてもできないといった事情もあると思います。

病院プラス家庭の理解。これがなかなか難しいところですね。

*災害支援ナースとは、看護協会の研修を受け、災害が起こった際に支援活動をする旨を登録しているナース(看護師)のこと。



床張りから壁のペンキ塗りまで全部自分たちで

～被災を機に新しい店で再出発～

（山陽小野田市 60代 女性 菓子店経営）

店のドアをおそろおそろ開けると、床には一面に汚泥が積もっていて、壁に残された水のラインから、20センチぐらい浸水したことが分かりました。

しばらくボーッと見ていたけれど、「とにかくお掃除しなくちゃ」と気を取り直しました。近所の魚屋さんの奥さんがデッキブラシを持ってきてくださって、何人かが泥の掻き出しを手伝ってくれました。店の中の物は全部捨てました。

真夏で暑いときでしたから、生のお菓子を扱うことをこれ幸いにお休みを決め込み、妹と2人、あせらずに力を合わせて店を新しくしようと決めました。「プロの人に頼んだ方が早いよ」と言われましたが、ホームセンターに通いつめ、床を張り、壁紙をはがしてペンキを塗りました。今度は店内でお茶が飲めるようにしたかったので、カウンターなども自分たちで作りました。

うちはまだ被害が軽い方でしたから、「こうでもない、こんなところ掃除しないよね。感謝、感謝」って言いながら、2ヶ月かけて完成させました。災害って悲惨ですけど、被災したからこそ、人間の力強さとか優しさみたいなものを強く感じる事ができたのかなとも思います。



一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

NPO 法人 東京いのちのポータルサイト 副理事長 鍵屋 一
防災リスクマネジメント Web 編集長 中川 和之
東京 YWCA 副運営委員長 池上 三喜子

一日前プロジェクトの物語をお読みいただいて、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

自然災害に遭遇して体験したことや感じたことなどを語り継ぐことは、災害体験者や被災者の重要な使命であると言えるでしょう。なぜなら、多くの市民は被災経験や災害体験を持たないため、災害に事前に備えることの大切さを頭で理解はしていても、実際に自分が被災したらどうなるかをイメージできず、何も対策を講じていないからです。

災害体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃると思います。その方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうことが多々ありますが、ここでご紹介する一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

一日前プロジェクトでは、被災された方々のさまざまな「思い」や「本音」を物語にして、災害体験・被災体験を持たない人たちに、災害が身近で、恐ろしいものであることに気づいてもらうことを本来の目的としています。今年度からは本プロジェクトの新たな担い手作りを始め、ジャーナリストの皆さんや地域の防災に携わっている方々と一緒に物語作りを行いました。今後も新たな担い手が増えることが期待されます。

一日前プロジェクトで作られた物語は、研修やワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部として使うこともできます。文字だけでなく、添えられている気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともありますし、ホームページでエピソードを紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法のポイントを以下にまとめましたので、参考にしてください。

※詳しくは、内閣府のホームページ <http://www.bousai.go.jp/km/imp/index.html> をご参照ください。

□物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2-4人集まっていただいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出して再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても振り返って取り上げることもできます。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。ただ、減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話の切り分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにします。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう？」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

これまで、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探す聞き取りを実施してきました。今年度からは、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すために、聞き取りの場をさらに増やそうと、聞き取りの担い手を増やす試みも始めています。

災害列島である日本では、不幸なことに毎年のように災害が発生します。その体験は、同じように見えても、一人一人にとっては厳しい経験です。その過程で辛い思いをした被災した人々の声を、一日前プロジェクトとして継続的に後世に伝えていくために、物語を聞き取る場を作り続けていきたいと思います。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

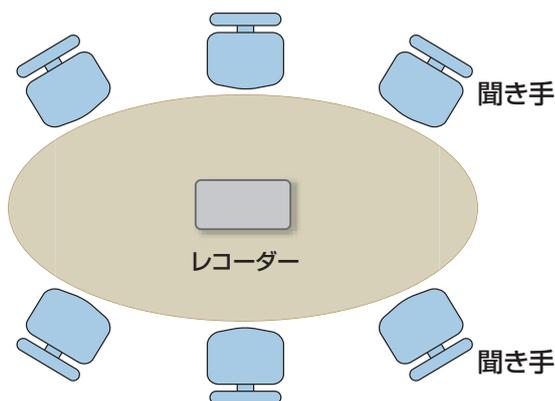
—簡単な手順を紹介します—

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする
※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

■発行
内閣府 (防災担当)
〒100-8969 東京都千代田区霞が関1-2-2 (中央合同庁舎第5号館)
TEL.03-3503-9394 <http://www.bousai.go.jp>